
蒼き流星 大地の恵み

的中青矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き流星 大地の恵み

【Zコード】

N4067V

【作者名】

的中青矢

【あらすじ】

メテオGの一件から数ヶ月後の春、星河スバルとその仲間達は小学六年生へと進級し、平和な生活を送っていた。誰もがこのまま平穀な日々が続くと思っていた。そんなある日、スバルの前に騎士と、謎の少年が現れる。その2人から聞かされる新たな危機、それは異世界から来た電波体であった。そしてまたスバル達に新たな試練が訪れる。救われた少女と、救われなかつた少年の、愛憎劇。今ここに始まる

どうも、的中青矢です。この作品についてまず少し説明をしたいと思います。

これは全作、「蒼き流星」の続編ではありますが、はつきりって前作を読まなくては大丈夫です。

『前作とは違う世界でのお話です』。

スバルのことについて一個だけ「原作との相違」がありますが、恐らくそれだけです。

なので前作を読んでいない方でも読みます。

逆に前作を読んだ方は、「これはこう繋がっているんだ～」というのを探してもらえば面白いかと思います。

そして前作を読んだ方はその「直接の」続編に当たる「蒼き流星希望への架け橋」もぜひいらんになつてください

<http://nocode.syousetu.com/n4094>

vv

では、御自分のペースで読んでください

タイトルの意味は「ある一人の女子高生」です

「ねえ、あなたは何でこんなことをするの？」

恋焦がれていた相手だから口にするのは大変だと思っていたが、不思議と口は動いた。

季節は秋だつたと思う。私もずいぶん昔のことだからあまり鮮明に覚えていない。そのときに見た紅葉がどうやって風に連れられていくかを、どんな風に夕陽が私たちを照らしていたのかは分からない。だけど、彼の横顔だけ今でも覚えている。

そのときの彼の顔は、一目見れば分かるとおり「面倒くさい」と語っていた。本当は照れてるだけじゃないの？ と思つたが口には出さない。彼はへそ曲がりなのだ。

「なんですか、ねえ」

眼下に見える街を見ながら、彼は呟いた。私の予想とは違つて、彼は特に照れてる様子は無かつた。あくまでも真剣な眼差しのままだ。

彼は変だと私は思う。彼と過ごしたこの半年間を振り返つてみると、よく分かる。ふらつと現れていきなり拾われて眠る場所が無かつた私に寝床をくれた。さらに「独り立ちできるまではひつしょにいてやる」といわれ、気づいたらずつと一緒にいた。

彼の名前だつて分からない。一応彼が名乗つた名前で呼んでいるけど、本当にそれであつてはいるのかは半年間では分からなかつた。

「なんですか、つて訊かれても特に答えられないよ

「何で？」

「それについても『何で？』つて訊くのか？」

私はその問いに一いつ口りと頷く。彼は数秒私をジト目で見つめて、それから溜め息をついた。よっしゃ、これで彼は折れた。しかし私は期待した返答をもらえなかつた。

「答えが無いから、答えられないんだよ」

今度は私が溜め息をつく番だつた。なんだそれ、理由が無いのにそんなことをするの？ そんなのおかしいじやん。彼を責め立てるが、しかし答えは変わらない。

「別にいいじやねえか。俺の気まぐれで」「気まぐれで救われた身にもなつてみてよ」「運が良かつたな」「……そつじやなくて」

全く、本当に変で勝手だ。だから私は彼の気持ちが分からぬ。彼が本気で私に相手をしてくれているのかも、彼が本性を見せたときがあるのかも、分からぬ。

「別におまえを救つたのが気まぐれでも、おまえが救われたことには代わりが無い。殺す気が無くても相手が死んじまつたら相手は戻つてこない、それと同じ」

「酷い例えだね、それ」

悪かつたな、と返す彼。しかし私にとつてその応答は決して悪いものではなかつた。何故なら会話こそが人間の「ミニコニケーション」で、唯一彼と繋がれるものだから。

「だから疑問に思つても仕方が無いだろ？ 救われたんだから」

本当に理由が無いのか、それきり彼はそのことについて何も言わなくなつた。風に揺れる彼の髪が、頬りなさ氣に見えた。

「……逆に質問だけど、おまえは俺に救われて良かつたと思つていいか？」

「……えつ？」

予想だにしなかつた質問に、私は思わず訊きかえしてしまつた。

『俺に救われて良かつた？』

「だから、おまえは俺に救われて良かつたと思つていいのかって」

「……」

取り方によつてはいろんな面を見せる質問だ。ここで質問の解釈には一個があるために、私は少し考えなければいけなかつた。まず単純に助けられて良かつたか、という質問だつたらもちろんイエス。私は今生きていて本当に良かつたと思う。

一いつ目の解釈、「俺に」に助けられて良かつたか、ということだが。

「どうした？ 何かちよつとおまえ目がきょろきょろ動いてんぞ」

つまりは「俺によつて救われて良かつたか？」という受け取り方だ。いや、もちろんイエスなんだけども、それを言つといつことはいささか気が引ける。

彼がどつちの意味で訊いてきたのかが分からぬ以上、迂闊にイエスとも言えない。どうすればいいのか、自分の顔が火照つてゐるのを自覚しながら私は思案した。

いつそ訊いてみるか。

「ねえ、それどっちの意味で言つてるの？」

「……一つ意味無いだろ？」

詰みました。確實に詰みました。チヨックメイト、王手、思いつくのがこれしかるのが残念だけだとかくゲームは終了されました。

まずい、本当にどうしよう。どう答えばいいか分からない。ノーと答え辛いし、かといってイエスとも言えない。そんなジレンマを破つてくれたのは、意外にも彼だった。

「迷うならいいぜ？　迷つくりに微妙なことだつてことだらっ？」

「へつ？」

我ながら素つ頓狂な声だな、と思いながら私は声を上げてしまつた。しかし彼は構わず口を動かす。

「別に、俺が誰かを救つたからといつてそいつが喜ぶかは分からないんだからさ」

そう口に出す彼のは落ち込み、唇も微かに震えているようだつた。しかし目じりに光るものは見えない。

彼の訊きたいことがいまだ分からぬ私は彼に何と書つたらいいかわからなかつた。しかしそれを考え出すよりも早く、彼は私は反対方向に足を向けた。

これも彼の癖だ、さつきまで何をしているのかと思えばすぐどこかへと行こうとする。私も最初は彼に何度も置いていかれたものだ。しかし今ではさすがに置いてかるはずがない。

「　来るな」

そう彼が言うまでは、私は本気で彼に置いてかれるとは心の片隅にすらなかつた。だけど、現実は心にはないものを私に突きつけた。

「もう、ついて来るな」

先ほどから彼が放つ言葉の数々は理解不能だつたが、それは頭で認識することも叶わなかつた。雷に打たれた、と表現すればいいのか、それとも私自身がそのとき固まつてしまつたのかは分からぬ。だけど言えることは、彼はそのまま私を置いてどこかへと言つてしまつたということだ。

果然としている私に彼が最後に見せたのは、その寂しげで軟い彼自身の背中だつた。

なんてことを思い出すのはいいが、しかしあれから四年経つても彼から音沙汰は無い。せめて記憶だけでも彼と一緒にいたなら、という淡い願望が私に回想させたのだ。高校一年生にもなつて、小学六年生のころの恋にすがるなどなんて馬鹿なのだろう、と思う。しかし無理矢理に思い出されるのだ。

「はあ……」

時刻は7時半、そろそろ登校の時間だ。女の子らしく髪を整えようとブラシで髪をとかす。しかし彼女の髪はもともと肩までしかなく、とかすのに一分もかからなかつた。

彼女は親元から離れて暮らしあり10年、うち5年を孤児院のような場所で過ごし、それから彼に惹かれ、残つた四年半を自力で生き抜いてきた。たつた一人の少女がそれを実行するのがどれほど

困難なことが。ゆえに彼女は同世代の人間よりも人間性や生活能力は高かつた。

髪をとかし終わった私はとうに着替え終わっており、あとは学校に向かうだけ。しかし私はテレビの電源を点け、それを見始めた。このままだと学校に遅刻することになる。ウヨーブライナーで30分もかかる学校に通つているために、テレビなど見ている余裕がない。だがお構いなしにテレビのニュースを見る。

画面に映るのはどこかにある山の麓 一目でフジ山だと分かつた。そして他に映つてているのサテラポリス二ホン支部と、青い人間を囲む人の輪だ。

「へえ、そういえば今日だつけ」

我ながら高い声を響かせながら窓の向こう側に見える紅い星に目を向ける。たしか、WAXAの話ではあの星のコアを壊すらしい。それが失敗すれば紅い星、メテオGに地球はやられて今の文明が滅びるのだとか。

それもあり私が通つている学校以外は閉鎖、おそらく今街にいる人間なんて誰一人としていることは無いと思つ。みんながみんな、地球の命運をかけた大勝負に目を向けている。
しかしそれはばかばかしいと思う。滅びるときは滅びるのだから、いつも通り過ぎせばいいのに。

『……学校とやらにはいかないのか?』

右腕にある水色のハンターから、私のウイザードが出す低い声で訊いてきた。このウイザード 元はただの電波体 とも結構長い付き合いで、もし文明が滅びるなら彼とも別れてしまうだろう。

『今日は』「一チヨー」とやらが決めた方針で行かなければならな

いのだから?』

『そりだけ別にいいよ。面倒くせー』

私はテレビから田舎者を離さずに答える。最近の若者はテレビの見すぎだ、と言わっている時代が200年続いているがその恩恵を私も受け継いでいる。

『世界が滅びるかもしないと思つていたら腹痛が発症して行けませんでした、つていえぱいのよ』

『……貴様はそれでいいと思つて居るのか?』『ローチョー』といふのは貴様が近くす相手であろう?』

「ああ、近くすとかそんなんじやないから。ただ権力が強いだけの奴に、何で私が近くさなきやいけないのよ』

その返答にこたか不満げそつだつたけど、けど特に抗議をしてこなかつた。たぶん『我とは違つ世界觀を持つて居るのだな』とか何とか考へて居るに違ひない。氣難しそうな顔をして案外考へは單調だつたりする。

『……まあよい。だが貴様は何を見ている?』
『世紀の一瞬、かな?』

笑いながら答える私には、世界が滅びることへの恐怖はない。だつて結局は救われてしまつんだから、どんな世界も。今テレビに映つて居る青い電波人間が負けよつとも、きっとまた彼なら救つてくれる。

『たしか、前回はあいつは来た。だが今回は来るとは限らんが?』
『もしヒーローが負けるよつな』ことがあれば来るよ』

ハンターの住人に溜息を疲れた。それも盛大な。一体何がおかしいんだろ?、と思いながら目を向けるとさも知つたようにウイザードは言ったのだ。

『期待しているのか? また英雄が負けるのを』

その質問に私は数秒無言でいたが、すぐに一いつと笑つてあげた。全くなんでこんなにも言われたくないことをいつてくれるのだろうか。ウイザードは確か高性能な電波体なはずなのにこの女心も分からないとほ

「期待しているよ? だつてそつじやなきや来てくれないもん」

『……前回は突然來たから今回も來るとは限らんと何回言えればいいのだ? 我が主人^{オペレーター}ながら呆れ果ててしまひ』

「いつもでしょ?』

何故彼が私にこんな騎士の鏡みたいな電波体をくれたかは分からぬ。だけど一つ言えることは、私とウイザードには共通項があるということ。

『……悪いが奴がもし現れるようなことがあれば私はどんなどいろへも向かうぞ?』

「メテオGつて、ウイザードじゃ無理でしょ?』

『奴がいるならどこへでも行く。おまえが奴のオペレーターをどう思つていようが知らないが、あいつだけは私に譲れ』

今度は私が溜息をつく番だ。冷静そうで堅物、よくクールな顔に秘められた熱い心、なんて漫画なんかのキャラで見るけど、実際横にいるとただうざこだけだということを認識させられる。

『いいな?』

「『』勝手に。私もそつちには用はないよ」

『なりいい。あいつが現れ次第私は急行する。「ガツコー」であるうと『』であるうと、見つけ次第すぐにはだ』

「分かつたから、ちよつと黙つてて」

テレビではもう世界の期待を背負つたちつぽけなヒーローがメテオGへと向かうところだ。正直、負けて欲しい。死んで欲しいとまでは言わなくとも彼が来るなら軽い怪我くらい負つて欲しい。だつて、何であるとき急に去つていつたか知りたいもん。

でもきっとこのヒーローは勝つてしまふんだろうな、つて思つちやう。だつて目が違う。結構前にどこかのスキー場で現れたつてニュースがやつてたときの映像よりも、明確な意志が宿つてゐるみたい。本氣で勝つや、つてのが画面越しからでも分かる。

「どうなるんだろ?『』の世界は」

そんな私のどうでもいい呟きと同時に、ちつぽけな勇者は紅い流星へ飛んでいった。けどここから先の戦いはテレビじや見れない。私も特に行く気はないし。

「じゃあ、学校行こ?うか」

『……結局行くのか?』

「うそ、やることないし」

もう一度溜息をウイザードを尻目に、私は靴を履いて外に出た。やつぱり街は閑散としている。だから好都合、ウーブライナーなんか無くたつて登校時間には間に合つちやつ。

「じゃあ、頼みますよ?」

『……我を無駄に使つな』

「いいじや こいいじやん今日へりこ。体動かすこと魚たかやつみ」

「？」

その言葉に反応してカーネギーは体をピクっとせわる。効果観面、やつぱり単純だ。

『……好きなように仕え』

「やつら、じやあ使わせてもらひこますよ。」

ハンターの中からアイテムという欄を選ぶ。本当だつたこじはいろんな写真とかが入つてゐるんだけど、私の場合はひょつと違つ。そのたつた一つのアイテムだけで容量が一杯になつちやつ。

「では行きましょ。 電波変換CF 水城明菜 オンエア！」

感想お待ちしております。ユーザーの方でなくとも感想がかけますのでよろしくお願いします！

1st The spring vacation ends soon (前書き)

タイトルは「春休みはもうすぐ終わる」です

「明日からまた学校か……なんだか哀しくなるな」

はあ、と溜め息をつきながら大柄な少年が横にいるトサカ頭へと話しかける。太陽が真上を過ぎて从此から時間は1時くらいだろうか。時間帯としては一番暑いことから大柄な少年 牛島ゴンタは汗を搔き始めている。

「そうだね、ゴンタ。……でもそれって、君が宿題をまだ終わらせていなかからじゃないの？」

「そ、そんなことはないぞスバル。俺はちゃんと委員長の言つたとおりにやり遂げた！」

本当に？ とゴンタの横でスバルと呼ばれた少年が苦笑する。どうやら彼はゴンタが宿題を終わらせたとは思っていないらしい。

今日は春休み最終日、進級する児童は2週間という短い休みの間に宿題を課される。一部の児童は今日初めて宿題に手をつけるというのもいるかもしれない。そんな日に小学六年生2人は悠々と歩いていた。

この2人のツーショットというのは珍しい。彼らがいるならば白金ルナや最小院キザマロといった親友もいるのが普通なのだ。だが今日は見当たらない。

「……まあいいけどね。今日徹夜しようとも。暁さんのお見舞いを遅らせるわけにもいかないし」

今日の夕方頃に親友4人組は暁シドウ メテオGの一件で重体を追つてしまつた人の見舞いに行く予定なのだ。しかし何も持つて

いかないのもどうかということなので彼ら2人は今からお見舞いの品を買いに行くというわけなのだ。

本当であつたらルナやキザマロも来る予定だつたのだが、前者は生徒会長の仕事を抜け出せず、後者はどうしても行かなければ行けない用事があるとのことでのこの2人だけで行くことになった。そのことに対してもルナは

「あなたたち2人で本当に大丈夫なの！？」

と叫んでいた。だがルナが心配しているのはスバルではない。ゴンタのほうである。彼の発想は牛丼しかない。見舞いの品？ 牛丼でも買っておけという感じである。しかしお見舞いの品で牛丼が喜ばれることなどあまりないだろう。

何とか僕がするから、というスバルの説得とともに2人はスピカモールへとようやくやってきたのだ。しかし一向に決まる気配が無い。さつきから明日から学校だよどうしようかと2人で話していたのだ。諦めの悪い2人だ。

「とにかくさつさと決めちゃおつよ4時にはWAXAにいなきやいけないんだし」

「だけどさ、お見舞いの品つて何を選べばいいんだよ」

「さつきからフルーツバスケットつていってるじゃん

「だけど高いじゃん……」

どうやらゴンタは見舞いの品は安く済ませたいらしい。何で？ とスバルが訊いたところ牛丼クエストの最新作が出るからだそうだ。そんな理由でけちけちしないでよと呴いたスバルにゴンタは

「分かつた！ 僕が牛丼クエストを買ってそれを暁さんに貸せばいいんだ！」

なんてことを言い出す始末である。スバルは頭を痛めてしまった。
実に可哀想な子である。

「う～ん、じゃあどうしよう……」

安くておいしいもの、そして暁が好むもの。そんなものがこの世に存在するのだろうか？ とスバルは考える。考енаがらスピカモールを歩いているとスバルの目に駄菓子やという文字が映つた。

「あつ……」

「ん、どうしたスバル？」

遅れて「コンタもスバルが向いている方向へと目を向ける。そこには爛々と輝く駄菓子屋の文字。そして2人は同じ発想へと辿りついた。

「「……つまい棒！」」

「ドンガラガツシャーン！」雷にでも打たれたかのような感覚を覚える。暁シドウの大好物、うまい棒。1本10ゼニーのスナック菓子でありしかもおいしい。スバルたちが探していたものにとつてこれほど適しているものはないだろう。

「なんで僕はこんな簡単なことに気づかなかつたんだろう……」「ああ、今も俺それを考えている……。くそつ暁さんに悪いぜ。俺たちはあの人何を見てきたんだ」

悲観的になりつつあるがお見舞いの品は見つけた。なら今すぐにでも買うべきだ。ここでじつとしていても何も起こらない。

「じゃあ、行こうかスバル」
「うん、行こうゴンタ」

そういうて2人は駄菓子屋の仲へと入つていた。セリフだけ聞けばラスボスに突つ込んでいく勇者2人だが、実際入つていつたのはただの駄菓子屋である。どこにもラスボスらしきドラゴンやサタンは現れない。

意氣揚々と駄菓子屋にスバルたちが入ると店はがらんとすいていた。客は着ていなかつたらしい。そつちのほうが好都合かとスバルは考えお求めの品を目で探した。

「……あつた」

まるで伝説の聖剣を見つけたかのような雰囲気で言つが2人だが見つけたのは棒状のスナック菓子である。断じてその袋を開けると光り輝く黄金の剣が現れるわけが無い。強く握り締めると砕けて食べるのが面倒になるスナック菓子だ。

うまい棒はとりやすいようにと置かれたのか箱詰めになつて床におかれていた。品揃えがいいらしく種類はざつと見て20を超えていた。

「……どれを買おうか」
「うん、僕もそれを考えてた」

これだけの種類があれば何を買えばいいか分からなくなつてしまふ。全部1本ずつ買えばいいじゃないかと考える人もいるが嫌いな味も人にはある。それを含めてしまふと何を何本買おうかという話になるわけだ。

「やつぱり、チーズは譲れないよね」

そういうてスバルはチーズ味を買い物カゴへ5本入れた。

「ならピザ味も入れる必要があるだろ」

「ゴンタが今度はピザ味を十数本無造作に入れる。どんだけピザ味がすきなんだと突っ込まれてしまいそうだ。」

「ゴンタ、こんなにピザ味はいらないと思うよ……？ それをそんなにいれるならメンタイ味だつて必要だよ」

スバルは驚づかみにしたうまい棒をカゴに入れる。何だか数えるのが面倒くさくなつてくる。

「それならコンポタージュ味も必要に決まつている！ スバル、おまえを俺は見損なつたぜ……」

コンポタージュ味がカゴに入る。いつしかカゴはうまい棒だけで一杯になりそうだった。元々駄菓子やには大きなものなどない。何故ここまでうまい棒に異常な執着を見せるのかというと、以前お見舞いにいつたときにシドウに何本か薦められていたのだ。実際に「これだ！」と思う味がいくつかあつたらしく以来2人は「もうしうまい棒を食べるならこれだろ！」というものが決まったのだ。

「タコヤキ味も必要だと思うんだ！」

「エビマヨチーズを入れろよ！」

「だつたらチヨコレート味も」

「チキンカレーだろそこは…」

ぎやあぎやあわめく2人。うまい棒は2人を虜にしてしまったようだ。他の世界では考えられない光景である、全く。

と、そこで駄菓子屋に新たなる客が入ってきた。ぴたりと2人は喚ぐのをやめる。じうやらさすがに他人の前で子供っぽく喧嘩するのは恥だと思つたようだ。さつきから老婆店主がこちらを冷たい目で見ているのを知つているのに。

入ってきたのはスバルとゴンタがどこかで見たことのある顔だつた。銀髪に小学生にしてはやや高い身長、そしていつも闘争心をあふれ出している瞳。瞬間に2人はコダマ小学校の児童だと思い出したが名前までは思い出せなかつた。

けれど銀髪の少年は2人を知つているようで、すぐに口から名前を出した。

「あれ、星河スバルと、牛島ゴンタ……？」

「え、何で僕たちのこと……？」

そんなスバルの問いに銀髪の少年は苦笑しながら答えた。

「いやや、そりや知つているよ。おまえたちつて結構有名だぜ？
あの高飛車生徒会長の腰ぎんちやくつてことで」

「た、高飛車……？」

「腰ぎんちやく・・・？」

思わず首を傾げる2人。しかしそれに構わず少年は続ける。

「それに一時期星河はあのロックマンって噂もあつたからな。名前と顔くらべ覚えちまつ」

あのメテオGの一件のあと、スバルはロックマンではないかという噂で学校中がもちきりになつた。そのころのスバルはといふと結

構いろいろ質問攻めにされたりといろいろ大変で、早くこんな生活が終わって欲しいと願っていた。

だがその生活は急に呆氣なく終わった。原因はとこりと「こんなもやしつ子がロックマンのはずがない」という説からだ。そう、どちらからどう見てもスバルにはあの英雄ロックマンになる材料がないと判断されたのだ。だからスバルをロックマンだと思っている人間はコダマ小学校では数少ない。

「あ、ははは、そうだったねたしかに」

本当にロックマンだとこの少年には知られてはいけないとスバルは愛想笑いに徹する。

「つていうか、おまえ誰だ？」

「ツ！ ゴンタ……」

さつきまで黙っていたゴンタが急に質問した。スバルは内心冷や汗状態だった。「おまえ誰だ？」なんて失礼なことを言つてしまつのはさすがに駄目だらうと考えたのだろう。しかしゴンタはそれに対し特に悪びれた様子は見せない。

「あ、そつかそつか。おまえたちは俺のことを知らなかつたんだ」

けれどあくまで少年は笑つたままだつた。特に気にする様子も無い。そんな細かいことなどどうでもいいとばかりに。

「苗字はカイ、名前はハヤテっていう。よろしくスバルとゴンタ」

「……」

「……」

おずおずとしたスバルと黙つたままの「ゴンタ。だがそれを見てもカイは笑つたままだつた。

「それにしてもおまえら……なんでそんなにうまい棒買つてるんだ？」

「そ、それは……お見舞いの品だから」

「お、お見舞い……？」

「？」を頭の上に数十個浮かべ、それを反芻し、何度も唱えたあとカイはどうしたかといつと。

「はははははははー、お見舞いの品！？ おまえらどうこいつ神経してんの？ うまい棒がお見舞いの品つて失礼とか通り過ぎてギヤグかよーーー！」

スバルとゴンタの喚き声よりも大きな声でカイは笑う。心なしか涙も出でこぬ。どうやらつぼにはまつてしまつたらしく。

「いやいや、おまえら面白いわ。出来れば当たらしくクラスとはおまえらとがいい」

まだ笑いながら、けれどしつかりと二人を見つめながらカイは言う。心底楽しこと声わんばかりに。

「ま、おまえらの神経はちょっとどうかと思つけどな」

「……そんなに笑わなくともいいじゃん」

「いや面白いよ星河。なかなかそれを選ぶセンスを持つている奴はいねえ……。案外おまえ面白い奴になるかもな」

ただの馬鹿になるかもしれないけど、ヒカラに笑うカイ。どうやら

らカイはよく笑う人間のようだ。といつも笑いすぎである。

『カイ、そろそろ時間だぞ？ 早く菓子買って帰ろ！』

「おっ、そうだなゲイル。悪い』

姿の無いものからの声、それを聞いてカイのウイザードかなとスバルは思う。ゲイルというのがおそらくそのウイザードの名前なのだろう。

カイはすぐに田当てのものをカゴへと入れて会計を済ませてしまった。それから2人にもう一度顔を向け

「じゃあな2人とも。明日学校で会おう」

そういうて駄菓子屋から去つていつてしまつた。その背中を最後まで、ゴンタは視界に捉えていた。まるで怨敵を見るような目で。

「……ゆるせねえ」

「えつ？」

スバルはゴンタの言葉を聞き取ることが出来なかつた。ゴンタも言つ氣が無かつた。だからスバルは「腹減つたともいつたのかな？」と思いその続きを考へるのをやめた。

「さて、と。ゴンタ、これくらいでもいいよね？ 結構買つたし」

数えてみると50本近くある。こんなくらいあるのはさすがに邪魔かな？ でも前にダンボールにうまい棒敷き詰めてあつたのを見たからな、と自問自答しながらゴンタに聞く。しかし返事は無い。

（……何かあつたのかな？）

しかしさつきのカイとの会話でひつかかるようなことは特に無かつた。だから何も無いはずだとスバルは考える。

それからすぐさま会計を済ませ お代はあとで4人で割り勘となっている 2人は駄菓子屋から外へと出た。まだゴンタの期限が何故悪いかが分からぬスバルであったが問題はないと考えていた。おそらくまだうまい棒のことを根に持っているに違いないと考えたのだ。

ハンターを見てみるとメールで「響ミソラ、単独ライブ！」と書かれたメールが着信されていた。そういうえば今日ミソラちゃんのライブあったのか、見に行きたかったなーと思しながらメールをよく見てみると添付ファイルがあつた。

「えーっと、これは何だろ?」

そう思いながらひらひらしてみるとビデオライブの録画ビデオらしい。わざわざこんなのが配信されるとほんとミソラちゃんと思うスバル。しかしすぐにその動画を停止させた。

「……あれ?」

スバルがとめたのは何もミソラの絶好の表情を拝み倒したいからではなかつた。彼の視線は観客へと注がれている。やつ、観客へと

「なんで、キザマロ、こんなところにいるの……！」

1st The spring vacation ends soon (後書き)

では、感想まつても～す

意味：日常は戻ってきた

「……すいません、遅れまし みんななんでこちらを睨んでいるんですかっ！？」

夕方のWAXA、そこでは暁シドウのお見舞いに今キザマロが到着した。他のスバル、ゴンタ、ルナはもう30分前には到着しているにもかかわらずだ。

「……キザマロ、何で今日はこんなに遅れたの？」

ルナの冷たい視線がキザマロに突き刺さる。昼^ひ見^たビデオをスバルとゴンタはルナに見せていた。裏切りかもしれないと思ったが、実際裏切ったのはキザマロである、と結論を出し密告したのだ。

「え……だから用事があつたん 「

「おい、一体何を話しているんだ？」

ふいに暁の声が病室に響いた。部屋は個室で、さらにスバルたちのような小学生には分からぬ医療器具がそこに存在していた。余程の重体の人間でなければこんなにも必要にはならないだろう。

あのとき、ジョーカーの爆発に巻き込まれた暁は重体で発見された。決死の救命活動によつて意識を取り戻したのがつい一ヶ月前。それまで暁はスバルたちには死亡したと伝えられたためいろいろとショックだつた。みんな泣いて喜んで見舞いに行つたのが逆にシドウの傷に触つてすぐに退室。それが前回の見舞いだつた。

だから今回は前回のようにはいかないぞ、と思っていたのがどうやら一人のせいだ台無しになつてしまつたようだ。

「……いえ、何でもありませんわ」

せつかくの見舞いで悪い話をルナは聞かせたくは無かつた。ちょっとこっちに来なさい、と無理矢理にキザマロと退室する。ちょっとそれはゴリ押しすぎないか、とスバルは思ったがそんなこと怪我人の前で言いたくなかった。

でも、なんでキザマロはミソラちゃんのライブに一人で行つたんだろうと考える。けれどさつきから何時間も考えているのだ。今更答えが出るわけではなかつた。

「どうしたんだルナとキザマロは？ 2人してトイレか？」

「そ、そうだよキット！ 2人とも便秘気味なんだよ。本当に困つちまうよな、あつはつはつはつは」

ルナと同じようにゴンタも無理矢理に繋げる。不自然というか何だか怪しい人みたいだ。

「……2人とも、大変なんだな」

暁もスバルとゴンタの挙動不審が心に引っかかりながらも言及はしなかつた。してはいけない雰囲気を2人が醸し出して、冷や汗も搔いていたからだ。けれど2人は気づかれなかつたことに露骨に安堵してしまう。

それを横目で見ながら暁はスバルとゴンタから貰つたうまい棒9本目を取り出す。昔に一度廃止されたピザ味だ。これがなかなか食べられないんだよな、袋をぺろりと開けて呑く。それからサクサクサクサクサクと軽快な音共にうまい棒が減つていく。驚異的なスピードだ。

「また、こいつを食べられるなんて思つてはいなかつたな……」

『な～にしょぼくれた顔しているんだ暁。らしくねえぞ』

その声が聞こえるのはスバルのハンターからだ。次に瞬間にはもうその声の主はウィザード・オンしていた。

蒼いボディと真紅の瞳、全てを切り裂いてしまいかねない鋭利な爪、そして乱暴な言葉遣い。そんな四拍子が揃っているウィザードなどこの世に1体しかいない。

「ウオーロック、そんなこと言つちや駄目だよ」

『ああ？ だつてよ、生きてるのにまるで死んじまつたみたいに言つんだぜ？』

それが生き残った奴のセリフかよ、彼は呟く。どうやら彼なりに暁を励ましてているつもりらしい。けれど死ぬか死ないかの境目をさまよつた人に言つ言葉ではない気がする。

「ははは、たしかにそうかもな」

暁はウオーロックの言葉を否定しなかつた

「けど少しだけ違つぜウオーロック。別に俺はしょぼくれちやあいない」

『おまえ、自分の顔を一度でも見たことあるか？ 大分ふけたように見えるぜ』

「老けとらんわ！ まだぴちぴちのふわふわだ！」

老けた、という言葉に暁は反応した。皺で来たのか？ と「ンタが追い討ちをかける。しょぼくれた顔ではなく暁は泣き顔になりつつあった。

「……とにかくだ。俺はふけてもしょぼくれてもいないぞみんな。

髪も抜けていない！」

『……何かあつたんだな?』

「何もないわ！」

大声で叫ぶ暁にスバルは身体は大丈夫なのかと思ってしまう。今も服の内側に包帯が巻かれているのがかすかに見えるのだ。つまり傷はまだ治っていない。傷が開いてしまわないかとひやひやしているのだ。

「……いいか。俺はしょぼくれてはいない。ただ、な。」いつつまい棒とかを食べていたりおまえらを見ていると思うんだ。ああ、帰ってきたんだなって

「……ツ」

その言葉にスバルやウォーロックは呑んでしまった。その暁の言葉の重みを知つて、感じ取つて。

暁にとつてはほんの一ヶ月前にようやくメテオGの一件が「終わった」のだ。彼が意識を取り戻すと共に。キングとの因縁が幕を下ろしたのだ。

「つまい棒を食つて、おまえらと喋つて、そんな生活が出来るつてことは世界は平和になつたんだなつて実感するんだよ。……死にそうになつたからこんなこと思うかは分からぬけどさ、とにかく思うんだ」

「暁さん……」

戦いは終わり、世界は平和になつた。これでようやく暁も日常へとまた戻つていいく。電波変換は身体に負担をかかりすぎるためにもうするなと長官から言われたらしきれど、それでも彼は生きてい

る。サテラポリスの仕事は他にもたくさんある。

「ん？ なんでスバルは泣きそつなんだ？」

「……『ゴンタ、空氣を読もうよ』

『プロロロロ、俺にもわざりぱりだつたぜ』

次にウイザード・オンしたのは赤いウイザードだった。一目見ればそれが牛だとこりごとに気づく。直角に曲がる角がそう照明している。

『オックス……』の俺でさえ空氣を読んでいるんだ。つてか狭い部屋におまえみたいな熱い奴が出てくるんじゃねえ！ 暁の身体に影響が出たらどうする！』

『だつたらおまえもハンターに戻つたらどうだ？ おまえみたいな野郎がいると暁もうざつたくて仕方がねえと思うがな』

『んだとこの牛肉野郎！ 焼肉にして食つちまおうか！？』

『脳筋野郎は黙つてろお！』

『なんていつたあ！？ 今すぐ表に出で！ ぶちのめしてやる！…』

『いいぞウォーロック、プロロロロ……！』

何故かウイザード2体はここに来て戦おうとしているらしい。どんだけ血氣盛んなんだろう。きっと人生は死ぬまでではなく魂が燃え尽きるまでだ！ などと思つてこるに違いない。あほか。

「ちょっと、2人とも静かにしようよ。今日は暁さんのお見舞いだよ？』

『『外なら問題ねえ！（プロロロロ）』』

さつきは暁の心配を口にしていたのによくそんなことがいえるなとスバルは呆れ半分感心半分だった。けれどこのまま野獣2体を野

放しにしておくつもりはないからこそ。それについては「コンタも同じだ。

「「ウイザード・オフ」」

その言葉と共に2体のウイザードは各自のハンターへと転送されてしまつ。200年前の人間がこれを見たら魔法だと思つかもしれない。

「すいません、暁さん」

「いや、元気なことはいいことだよ。逆におまえらの元気の無さを心配してしまつよ」

苦笑しながらハリハリと笑う暁。それまでの暗い表情はもう無かつた。

「まあ、とにかく俺もこれからを考えていこう。戦えないから警察やめる、ってわけじゃないしな」

「そんなこといわないでくださいよ。僕達は、またいつか一緒に戦えますよ」

「やつだぜ暁さんー、身体なんですか？」

「……戦いになる世界はもう嫌だろ？」

あつ、と口をそろえる2人。その間抜け顔を見て再度暁は笑つた。けれどすぐに表情を消してしまつ。

「……そういえば、ルナとキザマロはどうしたんだ？」

だがスバルとコンタはその間に黙り込んでしまつ。「暁さんのお見舞いがあるのにキザマロだけ抜け駆けして//ソラちゃんのライブに行つていましたなんていえるわけがない

「ま、まだトイレにいるんじゃねえのかな？ きつとそうだよ」
「あいつらのほうが、実は俺よりも重症なんじゃないのか？」
「そ、そうかもせんね。ほ、僕心配なんで様子見てきます」

スバルはすぐにルナとキザマロに戻るよう言つつもりだった。このまましらを切りとおすのは難しいと感じたのだ。

ドアノブに手をかけようとドアに歩み寄る。そして手をかけようとしたその瞬間、がちゃりとドアがひらいた。

当然ながらそのドアはスバルへと直撃、「ゴン」という生々しい音が部屋に響いた。鶏にドア、とはよくいったものだ。ちなみに鶏とはスバルの頭を指していく、もう一つ注釈するとそんなことわざはない。

「あつ、『めんなさい』

部屋の外から聞こえる女の子の声、一瞬誰？ とスバルはおでこをさすりながら思つ。ルナやキザマロの声とはまた違つていた。しかしそんな人がここに来るだろ？

部屋の中へと入ってきた人は意外にも見知つた顔だつた。というか三時間前にも少しだけ見ていた。赤い髪にエメラルドグリーンをした瞳、国民的アイドルとして知られた顔、

「やつほー、スバル君たち元気？」

響//ソラはいつもテレビの前と同じようにスバルたちに笑顔を向けていた。

「つていうかスバル君大丈夫？ ドアにぶつかつたから相当痛いとおもうんだけど……」

「み、ミソラちゃん！？」ビリビリーハーハー。

「ゴンタが裏返った声でそう叫んだ。余程驚いているのか田もかつと見開かれいる。「ゴンタはだがつくほどミソラファンなのだ。仕方ないのかもしない。

「え、聞いてないの？」

「聞いてないって？」

「ふふふふふ、それは僕から話させてもうこまますよスバル君」

見ればルナとキザマロも病室に入ってきた。個室といつてもそこまで広いわけではない。五人も見舞い客がいればそれこそ蒸し風呂状態だ。けれど最新鋭のエアコンが空気を涼しくしてしまつ。

「ミソラちゃんは、僕が呼んだんですよ

「キザマロが？」

キメ顔で語りだすキザマロにスバルは聞いた。

「はい、そうです。なにやら誤解をされていましたが、僕はライブまでこつてミソラちゃんに暁さんのお見舞いに誘つたのですよ

「……直接言こつ？」

「ええ、ミソラちゃんは今日ライブ。メールを送つてもきっと伝わるわけがないと思いましてね……」

「これ以上なぐりのドヤ顔でキザマロは語る。それほどミソラをここに連れてきたのが功績だと思っているのだろう。たしかに功績なのだがそこまでドヤ顔でいわれると何だかむかつくものである。

「ナビキザマロ、よくライブのチケット取れたな。今日ぎりぎり取

れたのか？」

「ふつ、何を言つているんですか、ゴンタ君。委員長がお見舞いを決めたのも今日、けれど僕はライブのチケットはとっくの昔から取つていたのですよ」

「な、なんだつて…？　俺はとれなかつたつて言つのにか？　と驚愕の声を上げるゴンタ。どうやら彼も行きたかつたらしいがチケットは取れなかつたらしく。

「本当に、キザマロくんには助かつたよ。私今日はぎりぎり時間取れてさ。今日逃したら暁さんが退院しちゃうかもしぬなかつたし」「いえいえミソラちゃん、礼にも及びません。紳士としては当然のことです」

国民的アイドルがただのがり勉少年にお礼を言つしチュエーション、あつと中々に遭遇する事はないだろ？　うん。

「……スバル君、ゴンタ」

突然今まで黙っていたルナが声を出した。それも、結構押し殺しているのが分かる。

「あなたたち、私を騙したわね……！？」

「ひいつ、い、委員長それは違う！　だつて見ただろあの動画。あれを見たらキザマロが抜け駆けしたと思つじゃんか！」

「いいわけうるわこゴンタ。私によくも恥をかかせたわね…」

わーわーきやーきやーと騒がしくなる病室。ルナの怒号とスバルとゴンタの叫び、ミソラがそれをとめようとするが止まらない。いろいろこらと混沌としていた。

『シドウ、……これがあなたの日常になるのですね』

暁のハンターから彼の相棒・アシッドがそうこう。

「……ああ、平和な世界であいつらと俺は過ごすんだひつな『嬉しいですね。……ウォーロックはいりませんが』『そんなこというなよ。それにおまえも死に掛けているんだぞ?』『ウイザードは復元できます。問題はあなたのほうです』

そうだな、といつ暁。けれど傷を負ったことに彼は後悔していい。何故なら彼は守れたから。この世界と、子供達のキズナを。

「いいんだよ、これで」

自分に言い聞かせるように、暁は言つ。そして願つ。もひ、この世界で戦いが起こりぬよつと……。

『緊急事態発生 緊急事態発生 謎の電波体がWAXAを襲撃 緊急事態発生 緊急事態発生 謎の電波体がWAXAを襲撃』

それは突然WAXAで鳴り響いた。平和を壊してしまつもの、戦いを呼び起こすもの、誰もが望んでいないもの。かくして、彼らはまた戦いに巻き込まれることになる。世界を渡り歩いた少年の、尻拭いをする形で。

2nd It returned in daily life. (後書き)

かんそくまつてまーす

3rd a boy was hit (前書き)

意訳：少年は殴られた

3 r d a b o y w a s h i t

サテラポリスからのメールによると、どうやら謎の電波体は高速でWAXAの中を移動しているらしい。サテラポリスとWAXAが共同で追つても追いつけないくらいに。RWウォール リアルウエーブの防御へ木をぶち破つたほどの力の持ち主だと聞かされた後では、それも特に驚きもしなかった。

それを知ったスバル、ミソラ、ゴンタは各自で謎の電波体を探すことにして、一旦別れた。もし敵が見つかった場合すぐに知らせると約束をし。

そしてスバルは今WAXAの中を駆け回っている。探しは初めてもう10分だが見つかる気配も無い。周波数が感じ取れないのだ。

(……この感じ)

謎の電波体、そ周波数がない、そしてRWシールドを破るほどの実力者、スバルはある一つの結論にたどり着いていた。

『……なあ、スバル。謎の電波体って

「うん、その可能性は充分にあると思う」

ハンターの中にいる相棒にスバルは頷いた。それから自分が緊張していることを心臓の音で理解しながらも冷静にWAXAを走る。

「謎の電波体は、僕たちの恩人かもしれない」

ムー大陸の一件でのことだ。あのときスバルは世界の命運を賭けてラ・ムーと戦うことになった。全ての思い、キズナを背中に背負い、彼は最後の最後まで戦い抜き、『負けた』。

そう、このスバルはあのときにはラ・ムーに敗北したのだ。負けるつもりはなかつた。手を抜いたわけではない。そんなことはスバルはしない。ただ運が悪くて負けただけなのだ。

そしてそのまま世界はオリヒメの手によって支配されてしまうと、スバルは意識を朦朧とさせながら思つていた。

だが、事実は違つた。

颯爽とどこから現れた電波体がスバルと世界を救つたのだ。それも、圧倒的な強さで。

薄めのスバルでも分かつたのはその電波体の色が銀色なのと、風を操るということ、そして何故か周波数がないだけ。それ以外には何も分からなかつた。どんな顔をしているのかも、性別はどちらなのかも。

だがスバルにとつてはそんなことはどうでもよかつた。ただ自分を救い、世界も救つてくれた。その事実だけが嬉しくて、感謝の意で胸が一杯になつた。

しかしその電波体は現れたときと同じようにどこかへと消えていつた。お礼もいえないまま。まるで世界から消えてしまつたかのようだ。

「もしかしたら、また来たのかも知れない……どんな理由で来たのかは分からぬけど」

その銀色の電波体がどんな目的を持っているのかは分からぬ。ラ・ムーを圧倒的強さで倒したことから世界を救いたいと思つてゐることは間違いないと思つ。しかし、ただの気まぐれかもしれない。

「でも、もし今回の電波体があの人なら」

『お礼をいいたいってか。全くおまえらしい』

「ウォーロックは違うの?』

『あのときはあんな奴がいなくても俺が倒せた!』

ウォーロックらしいね、そういうつてスバルは苦笑した。

「とにかく、今回の電波体があの人ならお礼はきりと申おへ。」

「WAXAを攻撃したのだけ、きっとわけがあると思ひし」

『そんなの決まっているわけじゃねえぜ？ 今日は世界を潰そうと考へているのかもしれない』

「そんなわけないよ。それだつたらオリヒメが世界を支配してからラ・ムーを倒せばいいじゃないか」

『かもしれない。だけどなスバル。今回の襲撃者があいつだとは限らないんだ！ 浮ついた心でいると、また前みたいにやられるぞ！』

『？』

そう、まだ襲撃者がどんな姿をしているのかもどんな目的を持っているのかも分からない。ここで気を緩めていてはウォーロックの言つとおりまた負けてしまう。

「……分かった。とにかく敵を見つけよう」

生憎まだ誰からの連絡も無い。アシッドもまた敵を発見しようとしているはずなのが、そのアシッドさえも見つけられない敵普通に考へて有り得ない。

電波体というのは常に周波数を放つてゐる。つまりWAXA内全域でサテラポリスに登録されていない周波数を見つければいい話なのだ。

「……おかしい」

まさかもう逃げたのでは？ と思ったスバルだが送つたメールの返事は簡潔に「それは有り得ない」ということだつた。WAXAか

ら外に出たらカメラによつて視認される。

だつたらWAXA内にもカメラはあるのではないか、という疑問が上がるがカメラはある。そして視覚もない「はずだ」。

『おいおい、敵はびびりなんじゃねえのか?』

「……何か時を待つているのかも」

『高速で移動つていつても絶対に見えるだろ?』

つて、メール

が来たぞ! ミソラからだ』

すぐにスバルはその場で停止、メールをすぐに開ける。

「……建物の、上…?」

『はあつ、屋上つてことか?』

『……違うと思う。屋上なんていない……多分、この建物の一番上にいるつてことだ』

死角、カメラは建物の中と侵入される可能性のある場所しか設置されていない。建物の『上』なんて、設置する意味がないのだ。

「つまり、家で表わしたら屋根の上にいるつてことだ……なんでこんなところに」

『わけがわからねえぞ……』

わざわざWAXAに奇襲をかけた理由がよもやWAXAの『屋根』に上りたかったというわけではあるまい。

「……僕たちを誘つている?」

有り得ないはずではない。屋内は狭い、しかし『屋根』は天井や壁などがない分戦いやすくはあるはずだ。

「ミソラちゃんが敵を見つけたのは、故意ってこと……？」

『おい、それじゃあやべえぞ！ RWシールドを1人でぶち破る敵にミソラじゃ敵わない！』

「とにかく急げ！」

WAXAの『屋根』と表現される場所にスバルは急いで向かった。が、時間が遅かった。

見ればそこにはミソラと、メールを見て駆けつけたであろうゴンタの姿があった。しかしどちらも白い『屋根』に倒れ伏せていて、立ち上がる気配を見せない。

「ふ、2人とも！」

慌てて2人のもとへ駆け寄る。電波変換は解けてしまっているが、どうやら2人の命に別状はないらしい。……ところどころに落ちている真っ赤な液体が落ちているから死んでしまっているようにスバルには見えた。

「なんで、2人が……？」

ミソラ一人ならともかく、ゴンタもいて負けるとは考えにくい。恐らくミソラが倒された後にゴンタが来て、ゴンタも敗北したといふことだろう。

『……スバル、とにかく敵を見つけるぞ。話はそれからだ』

「でも、2人の傷が」

『いいか、ここで放つても死ぬわけじゃねえ。致命傷がねえのは明らかだ。それよりも、敵を倒すほうが』

『！』

ウォーロックの言葉が止まつたのを聞いてスバルは疑問に思ったが、すぐに原因を知る。

間一髪のところで敵の攻撃を避けるスバル、さつきまで彼がいたところには、一発の銃弾が着弾する。チュイン、と映画でおなじみの音がスバルの耳を揺さぶる。

銃弾がやつってきた方向を見ると、そこには1人の「少年」がいた。風貌はそれこそ普通の少年だ。茶髪にあどけなさの残る顔、身長はスバルと同じ程度、服は今にもスピカモールに出かけられるくらいのラフなものだ。

「おお、避けたのか。さつすが英雄！」

口笛でも吹きそつな声で少年は笑いながらそういった。その笑顔はここにはあまりにも不釣合いだ。

「……誰？」

「とにかくさ英雄、君つてシルバー・ウインドつて知つてる？」

突如そんなことを訊く少年、スバルの質問は見事なまでにスルーダ。

「……聞いたことないけど」

「じゃあ見たことは？」

「そんなのあるわけないじゃん。大体どんな人なのか」

不意に蘇るのはラ・ムーのときみた1人の電波体の姿、銀色と

風が吹き荒れる感覚。

シルバー ウィンド

銀色と、風。

「思い出したな？ そいつがシルバー・ウインドだ」

「……その人がどうしたの？」

「いや、特に。あくまで確認」

そのシルバー・ウインドといふ名前には本当に意味もないようで、それから少年はその名をここで呼ぶことは無かつた。

「それよりも、君誰？」

「そういう自己紹介はまだだつたな。俺は光烈斗ひかりねうとっていうんだ」

まるで初めて同じクラスになつた人への自己紹介みたいにいう彼の眼は、笑つていなかつた。何故かは分かつてゐる。スバルが敵であり、スバルも烈斗のことを敵だと認識してゐるからだ。

『……てめえ、なんでこんなことをした！』

「ん？ そりや おまえたちと戦つためさ」

「……なんで僕たちと戦うの？」

「そんなの決まつてゐるじゃないか」

烈斗はあくまで笑顔のままスバルに歩み寄つたかと思つと

「君がうざいからだよ」

一気にスバルの目の前へと移動してゐた。

呼吸する間もないとはこのことだらう。事実スバルとウォーロックは攻撃されるまで烈斗が目の前まで移動していることを認識できずにいた。

烈斗の脚が『屋根』を踏み鳴らすのと同時に、彼の拳がスバルの腹へとめり込む。その一連の動作は素人ではなく、どうやら何かの拳術をならつてゐるようだつた。

「え……」

痛みを認識する前に体が浮いていたことに気付いた。体が吹っ飛ばされて壁にぶつかったことを認識する前に痛みに気付いた。ぶつかった痛みを認識する前に壁にぶつかったことに気付いた。

「がはつぐふつ……ああ……！」

叫び声も出ない。それほどまでに烈斗の一撃は速く、強く、隙が無かった。

『な、なんでただの人間に……！？』

「電波体なら分かるだろ？俺がただの人間？おいおいそれは間違いだよ」

『なつ……』

改めて周波数を探すウォーロック、すぐにそれは見つかった。

『こいつ……人間の姿のままの電波体！？』

「そ、それって本当ウォーロック！？」

『嘘いうわけねえだろ！こいつは本当に電波体だ！』

町に出れば普通の少年と映るであろう烈斗、しかし実は電波体……？意味が分からなかつた。スバルはこれまでこの少年とウイザードが電波変換してそこからが戦いだと思っていた。だから油断もしていた。けれど実際は違う。最初から、烈斗は電波人間だったのだ。

「つてかおい、そのまま寝ているのか？おまえらにヒドリート

される気?」

スバルと烈斗の距離は約15メートル、しかしさつきもその距離はあつたのだ。それを一瞬で縮めスバルを一撃で瀕死においやるほどの攻撃を見舞う。

派手さなど無い。端から見ればただ思い切り殴ったというだけの話。きっとスバルがクリムゾンドラゴンと戦つたときの100分の1にも満たない攻撃だ。

「別にこのまま殴り殺されてもいいんだぜ?」

「……殺されてたまるもんか!」

膝が力に入りにくい、しかしだからなんだというのだ。それが殺される理由になるなんて馬鹿すぎる。

「君の目的が僕を倒すことなら、僕は受けてたつ」

「……いいね。最高だよ英雄

開戦だ」

3rd a boy was hit (後書き)

感想待つてます！

『……で、どう倒すんだ?』

「……分からない」

ウォーロックの問いにスバルは答えることが出来なかつた。何せ「謎の電波体」だ。姿は人間、それでいて電波体、どう対処すればいいかなんて彼に分かるわけがなかつた。

『……まあ作戦なんてなくていい。だけビスバル、相手の姿が人間だろうと手加減はするなよ』

そう、今回の問題は敵が人間の姿あるということだ。これでは倒していく存在なのか一瞬判断にかける。今まで守る存在であつた人間を、この手で倒す。

「……ミンラちゃんとゴンタを倒した敵なんだ。手加減はしないよ」

少しの動搖を隠せずに、スバルは形だけ頷いた。

「おいおい、作戦とか考へているのか?」

烈斗があきれたように訊いてきた。もちろん答える2人ではない。もちろん烈斗は親切に答えてくれるとは思つていなかつた。ただ拳を強く握り締め

「作戦を実行される前に潰すのが定石、つてね」

その場から一瞬で姿を消した。

今度こそスバルは烈斗の移動の早さに瞠目する。その地面を蹴る脚力が、その殺意を込める瞳が、スバルの知っている『人間』という概念から外れた存在である。

だが今度は黙つて殴られるつもりはない。すぐに左手にあるハンターを操作し、バトルカードを使用する。

「バトルカード スーパーバリアア！」

敵の攻撃を5回防ぐことが出来る黄色いバリア、それが瞬時にスバルの体を包み込む。

スバルがスーパー・バリアを使つたことに一瞬目を細くした烈斗、しかし問題ないと考えたのだろう。そのままスバルをバリアごと殴ろうと突っ込んでくる。

「岩塊」
[がんかい]

みなさんは八極拳というのをご存知であろうか？ チョイナ

で最も強力な拳術と目されている、超接近戦専門の拳法だ。

その高威力と引き換えに敵の眼前まで迫らなければいけないという欠点があるが、それに有り余る威力を誇る。

しかし高威力といつても近づかなければいけないのだから、攻撃を当てる前に負けてしまうかもしない。なのでほとんどの使い手は他の拳法も併用することが多い。

だが、烈斗は他の拳法を併用することはない。何故なら彼の移動速度は、敵の眼前までほぼ一步で迫つてしまうのだから。

烈斗が握り締めた右拳を前へと突き出す。それと同時に右脚で踏み込む。ダンッ、と『屋根』が鳴り響く。

右拳と右脚を出したので拳を一気に前方へと飛ばすことが出来る。そしてその「踏み込み」「助走」の威力で上乗せされた拳が、ま

つすぐにバリアへと向かっていく。

ぱりん、というガラスが割れたような音をスバルは耳にした。けれど烈斗の拳がバリアを破った、ということに気付くのが遅れた。スーパー・バリアは攻撃を5回防ぐ、だが烈斗の拳は一撃だけだ。

『スバル、避ける!』

ウオーロックのその言葉にスバルはハツとなる。烈斗はバリアを破り、二の手、三の手をもう講じている。左手を猫の手のように指を固め、それを一気にスバルのほうへと『押し出す』。

「倒^{とう}陀^だ」

「くつ……！」

間一髪でスバルは後方へとジャンプした。烈斗の左手が、あと数センチのところで止まってしまう。どうしても踏み込みをしようとすると

時間がかかる為にしなかったのだ。逆にいえば、左足を出してさえいれば今の一撃は命中していた。

だがまだ烈斗の攻撃は終わらない。腕で駄目なら脚で、リーチの長い脚を駆使し今度は右脚でスバルの頭を割ろうとする。

「なつ……でもつ」

しかしこの攻撃もスバルは距離を取ることによつて避けた。無理な体勢からの攻撃と、元々連携して出せるわけではなかつたということが失敗に導いたのだ。

攻撃がやんでもスバルは思い切り距離を取る。その距離20メートル。人間相手に取る距離ではない。だが烈斗はもはや人間ではな

いのだ。これくらいとつてこの世界のスバルは丁度いい。

「……なんだ今の」

『あいつ、ありえねえぞ！？ 電波人間ってのは人間の数倍の筋力を持っているんだ！ それと互角、それ以上をあいつは持っているぞ！？』

「落ち着いて、ウォーロック。あの子は人間じゃないんでしょう？」

そう、姿が人間というだけで中身は電波人間だ。そのせいで判断が鈍くなる。

（それにしても、あの攻撃……僕が戦ってきた電波体よりも強い？）

スーザンバリアが一撃で壊された、バリアが拳を弾けずに、貫かれてしまったのだろう。普通なら5回防げても、貫通されても意味が無い。

『おい、これはこっちから仕掛けるしか勝ち目はねえぞ！？ さつきはバリアで防いでからのカウンターってのが出来たかもしれないがな』

そう、スバルはそれを狙っていたのだ。バリアで攻撃を防ぎ、敵の作った一瞬の隙を重たい一撃で倒す気だった。

「だけど、あの子はそれすらもさせてくれない……！」

何か特殊な能力を使つたわけでもない、何か強そうな武器を振るつたわけでもない、彼が使つたのは彼自身の小さな拳だ。たつたそれだけなのだ。なのにスバルはそれを恐れなくてはいけなくなる。

『……遠距離からの攻撃は？』

「あの高速移動で狙い撃てる？」

撃てるわけがない。そもそも撃つ前にやられる。銃口を烈斗へと向けた瞬間に、勝負は決してしまったのだ。

「……だから僕らも接近戦で勝負するしかない」

『なつ……正気か！？』

「それしかない。じゃないと僕たちはあの子に傷一つ負わせられない」

今烈斗は20メートルというこの大きな距離をどう縮めようか計つているようだった。さつきから拳を構えたまま動く気配を見せない。ビザビザスバルが動いてから烈斗も動く気のようだ。

「バトルカード ファイアスラッシュ！」

右腕が炎の煌剣に変わる。それを見て烈斗は眉をひそめた。どうやら接近戦で挑んでくることを意外に思つていてるらしい。

「いくよ、ウォーロック！」

その言葉とともにスバルは一気に烈斗のほうへと飛び込んで行く。だがそれだけでは烈斗の攻撃をただ喰らいに行くだけだ。

そう、それだけでは。

『ウォーロックアタック！』

一気にウォーロックアタックによってスバルは烈斗の目の前まで移動する。烈斗は今まさにカウンターを狙っていたようで、出鼻を

くじかれる形になつた。

「……ツ」

だが烈斗はあくまで少しだけ舌打ちをするだけだった。まるで手のかかる子供に泣かれてしまつたかのような感じ、烈斗にとつてスバルの決死の行動はそれくらいの重みしかなかつたのだ。

しかし烈斗に鎧など攻撃を防ぐ物はない。つまりこのまま剣で斬られれば重傷を負うことになる。

「そこだつ！」

隙を作つた烈斗へとスバルはまつすぐに剣を振るつた。確実に防ぐことの出来ない一撃、これで勝負は貰つたと、勝手にスバルは勝負を決しようとしていた。だがしかし、その攻撃を烈斗は軽々と避けてしまつ。

それを追う形で剣を振るう。右、左、上、下、荒れ狂う攻撃を、だが烈斗には当たる気配がない。

「……えいつ！」

けれどチャンスが無いわけではない。一瞬の、これは絶対に避けられないだらうという縦の一閃。烈斗が避けようとしたその方向へと、それは振り下ろされる。

勝てた、スバルは思つた。これで戦況は変わる。ウォーロックが思つた。

その2人の思いを、烈斗は変えた。

振るわれた剣が、止まつた。それは、烈斗の手によつて。

「え……つ？」

ファイアスラッシュ、その側面を烈斗は掴んでいた。痛覚が鈍いのか、それともないのか、特に痛みを感じている様子は無い。じじじじと焼けるような臭いがスバルの鼻につく。

「で、これがおまえの力？」

「ぱきり、ヒ烈斗はファイアスラッシュを『へし折った』。なんの苦労もせず、ただ木の枝を折るかのように、へし折った。

「おいおい、これはないだろ。剣捌きはシルバー・ウインド キリュウの足元つていうか世界から違うつていうか。なんだろうな、とにかくおまえは論外だ」

氣付いたらスバルはまた烈斗の一撃を喰らっていた。今度は胸に両拳を当たられていた。

「爆雷」
ばくらい

それは胸で爆発しかたのような威力だつた。ただの拳でスバルの胸からバゴッという音が聞こえたかと思うと、スバルは地面に倒れていた。厳密に言えば20メートル後方へと吹っ飛ばされて。

「てつきりもう少し強いと思つていたよ……」これじゃあれだな。明菜にも勝てねえよ。弱すぎ、せつかく……まあいいや。どうせすぐ死ぬような存在だし」

溜め息を吐きながら烈斗はスバルへと近づいていく。やつたりと、勝利という一文字を現実にさせるため。

『『失敗作』の俺にも勝てねえのに、『完成作』のあいつには引き分けられるなんて、よく分からない話だな。……それとも『完成』しあでいないのか？』

ぶつぶつと烈斗はつぶやきながら、もう一度拳を握る。硬く、固く、堅く、スバルの体を砕かんとして。

「が、はつ……あ、あああ」

もはやスバルには息をしているのかが分からなかつた。電波体に呼吸が必要でないことも忘れさせるくらい、スバルの頭は麻痺していた。

『おいスバル！ しつかりしろ！』

『やめとけつてウォーロック……だつけ？ どうせそいつは意識を明滅させているんだ。しつかりしろなんて、いつても無駄さ』

『てめえ……何が目的だ！？ どうしてこんなことをした！』

ウォーロックはスバルと烈斗の間を割る形でウイザード・オンした。それがどれくらい無謀なことなのかは、彼だつて分かつていて、だけどこからは避けない。

『俺の目的……そうね、平たく言えば敵を倒す』

『その敵つてのは、スバル達のことか！？』

『おいおい、こんな敵がいるかよ。敵じゃなくゴミクズつていうんだ』

『てんめええええええええええええええつ！』

スバルのことを馬鹿にされた怒りにウォーロックは爪を大きく振りかぶつた。

『ビーストスイング！』

「だからそんなの無駄だつて」

烈斗はそんなウォーロックに対し、あくまでも冷静に、沈着に、完全に、無欠の勝利をするために構えた。

「華月」
かげつ

烈斗の肘うちが、ウォーロックへと決まる。その威力に言葉も出ない。静かになつたウォーロックはその体を『屋根』へと沈めた。

「つお……ウォーロック！？」

ようやく意識を取り戻したのか、スバルは倒れたウォーロックのもとへと駆け寄ろうとする。だが烈斗の攻撃を受けすぎたせいか、まともに力など入らない。

「あれ？ 意識は取り戻したのか？ 戦線からの復帰は早い、か。
だからつておまえが弱いことには変わりないけど」

「……きみ、は、一体、なん、なん、だ？」

「じいじいうなら……そうだな、しがない電波体だよ」

遂に烈斗はスバルの目の前までたどり着いた。けれどスバルはその場から動くことも出来ない。万策、尽きてしまった。

「さよなら英雄、いい夢見てな」

それはサッカーボールを蹴るかのような動作、八極拳なんて関係の無いただの蹴り、それがスバルの顎を打ち抜いた。

意識を失う数瞬、スバルは哀れな子供を見るかのような、烈斗の顔を見た気がした。

4th a boy is very strong. (後書き)

感想プリィイイイイイイイイイイズ（壊れた

まじで誰でもかけますぜ

5th violent aura (前書き)

荒々しいオーラ

「……ツ

スバルが眼を醒ましたら、視界にはただ真っ白な何かした映らなかつた。彼は一瞬、ここは死後の世界なのだろうか？ と考えそうになる。身体の感覚がない、指や足も動かない。ふうわと浮いているというイメージだろうか。魂だけが違う場所にあるみたいだ。

「……こには？」

「WAXAの病院よ」

「え……」

すると視界に白い髪をした老婆が入ってくる。その暖かなまなざしと、赤いフレームの眼鏡には見覚えがあった。

「ヨイリー博士」

「お久しごりスバル君。身体の調子はどう？」

「……なんで倒れているんですか、僕」

病院のベッドで寝かされていることはどうにかスバルにも理解できた。身体の感覚がないのはおそらく麻酔が効いているからだろう。「覚えていないの？ WAXAに奇襲してきた敵に、スバル君とゴンタ君、ミソラちゃんは負けてしまったのよ」

「……」

「ああっ……！」

それを思い出すと身体がまた疼きだす錯覚にスバルは襲われた。殴られた瞬間の一こま一こまがフラッシュバックされ、殴られた場所に深いな感覚になる。

「あの、烈斗は……？」

「烈斗？ それが敵の名前なの？」

「はい、光烈斗って名乗つていました」

「ひ、かり……？ 本当にそう名乗ったの？」

まるでヨイリーは知っているかのようだ。烈斗ではなく、光という苗字を。

「そうですが、心当たりが？」

「……いえ、多分違うと思つわ」

けれどヨイリーはそのあとを言わなかつた。否定したがつてはいるようだ。スバルにはそれが分からなかつたが、そこから言及しようとは思わなかつた。

「スバル君に報告するとね、ミソラちゃんとゴンタ君もあなたと同じように寝かされているわ。あなたほどではないけど、大きな傷を負つているわ」

「……大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ。3日で退院できると思つわ。もちろんあなたも

その言葉にスバルは首をかしげた。ヨイリーは大きな傷を負つてはいると言つたのだ。それなのに何故3日後には退院できるのだろうか。

「スバル君は、黄璃病院 穿城大学附属病院を知っている？」

「……聞いたことがあるくらいは

二ホン最大の病院といつてもいいくらいの設備と広さを誇っているといわれているくらいだ。知らないわけがない。院長の黄璃雷伽という人物も数度テレビで見たことがある。元は黄璃雷伽だけの病院だったのだが、去年穿城大学とも協力することになり、名前を2つ持つてている珍しい病院だ。一時期その話題で盛り上がったのだが、FM星人襲来という宇宙規模の事件でマスコミも騒がなくなつた。

「そこから治療薬を貰つたの。今はまだ試験中なんだけど、効き目は期待できるわ」

「……副作用とかは大丈夫なんですか？」

試験中、ということはまだ病院で使われていない代物だ。そんなものを使つていいとは到底思えない。

「大丈夫、身体に異変が起きることはないわ。ちょっと腹痛が起きるだけよ」

「そうですか、それならいいか……」

安心したとばかりにため息をつく。

「……その、光烈斗という少年はまだどつかに行つてしまつたわ。何でここを攻撃してきたかは分からない」

「そうだ、何でのの子はWAXAとサテラポリスのサークをかいくぐれたんですか？」

ただの少年、いやありえないほどの強さと謎を持った少年だった

が、それでも二ホン最強の番犬から逃れられるのは普通ではあり得ない。

「それには、3つの理由があるわ

逃げられたことを苦々しく思いながらも、ヨイリーは語りだした。

「まず、あの子はウイザードを持つていなかつた。これで周波数もないわ」

「でも、あの子自身からは」

「電波変換は解いていたのよ、攻撃して眼を眩ませてから、ずっとね。……彼の電波変換が特殊つてものもあるけどね。本当に微弱よ、周波数は。ウイルスよりも弱い」

なのにあんなに強いのはあり得ない、そもそもヨイリーは言つ。周波数＝強さというのはあながち間違つていないので。だがそれを打ち碎く少年が現れた。これは研究者として驚かないわけには行かないだろう。

「でも、カメラなんかはあつたから見つけられたんじゃないですか？」

「……あとで気づいたんだけど、ここはハッキングされていたわ。つい数日前、誰も気づけなかつたわ」

そのせいでどこにカメラがあるのかも完璧に把握されたらしい。周波数探索、カメラからも逃れられてしまつては、今の時代打つ手はない。

「今の時代対電波用に作られているから、電波を極力使われないで進入されるのは脆弱なのよ。そのためにRWタワーがあるんだけど、

それを突破されてもう詰み。テロリストも電波兵器を使わなきや
いけないのに、あの子はほとんど使わなかつた」

ただ、もう監視体制は強化されたらしい。熱探知機、カメラの増量なども加えられ、今は烈斗が進入してきても探知は出来るらしい。

「……それで、あの子は何なんですか？」

「身元も分からぬわ。1つだけカメラがその子の顔を映していたけど、データバンクにはなかつた」

「……この国の人間ではないんですか？」

久方の書
一 千日文語名略
一 ひがひ

謎が多すぎる、そういう結論しか下せなかつた。

「なんのために襲撃してきたかも分からない。また来るのかも予測できない。分からぬことだらけ。ただ一つ言えるのは、あの子がただ者ではないということ」

人間のような容姿をした電波人間、けれどそれは恐ろしいものだ。 いうなれば街の真ん中にいても誰もその脅威に気づけないのだから。 静かに人が消えていき、けれどその犯人はまた人ごみのなかに消えていく。

防音をしつかりと行つてゐるはずであらう病室の外から、何か獣のような咆哮が轟いた。ビリビリと壁が震え、地震でも起きているのではないかと勘違いしてしまいそうだ。

「ま、また敵が！？」

「いや、やうではないわ。これは

がきゅあきゅあきゅあきゅあきゅん！… と金属の屬が引き裂かれる音が聞こえ、病室のドアが破られた。

『スバルう……』

「つあ、ウォーロック！？」

そこには普段よりもさらに眼を鋭くさせたウォーロックがいた。だがいつもより変わっているのは纏っている雰囲気が大きい。重い、と評すればいいのか。全てを切り裂いてしまつ鋭さ、といったらいののか。どちらにしてもいつもよりウォーロックは荒々しかった。

『てめえ、負けてるんじやねえぞ…』

いきなりスバルの目の前まで行くと、動けないスバルの胸倉を無理矢理に掴む。うつ、とスバルは苦しそうにつなるがそれすらもうでもいいと思つてゐるかのようだ。

『俺達は1年前に負けて、絶対に今度こそは負けないと誓つたはずだ！なのに、なんでこんなボロ負けを喰らつちまうんだよー。』

「やめなさいウォーロックちゃん、スバル君は悪くないわよつ

『黙つてくれヨイリーの婆さん。俺はここに立つてているん

その赤い瞳でスバルを見据える。けれどスバルはウォーロックを見ることが出来なかつた。怖いのだ、相棒からこんなにも負の感情を向けられるのが。

『負けないと誓つてこの様か！ 今回は敵の気まぐれか何か知らねえが、被害者が出でいてもおかしくなかつたんだぞ！？ ミソラとゴンタだつて死んでたかもしだねえ。俺達もここにはいなかつたかもしだねえ！ それを分かつているのか！？』

「ぐつ……」

さらに胸倉を強く掴むウォーロック。しかしそんなことで喋れるわけがない。

「……やめなさいウォーロックちゃん」

再度語氣を強めて説得をヨイリーは試みた。

「あのとき……いえ、きっとこの世界にいる人間の全てが、光烈斗を止める事は出来なかつたわ。ウォーロックちゃんなら尚更。シドウちゃんが万全の状態でいても、きっと無理よ」

『……そんなことは分かつてんだ。でもつ』

「今はとにかく、みんなが無事であることを喜ぶべきよ。幸いスバル君たち3人以外の負傷者はゼロ、RWタワーも、半日後には復旧できるはず」

損害なんてなかつた、あくまでヨイリーは静かにいう。その言葉に仕方なしどばかりにウォーロックはスバルから腕を放した。

『……で、これからどうするんだ？ やられっぱなしじゃ少なくとも俺は気がすまねえぜ？』

「……サテラポリスが今捜索している。捕まえられるかは分からないけど」

事実上、光烈斗にあつたためには彼がまたスバル達の前に現れなけ

ればいけないとこことだ。その事実を知りウォーロックは舌打ちをする。

「あなたもまだ修復出来ていないんでしょう？ とにかくもとの部屋へと戻りなさい」
『……分かつたよ』

ウォーロックは破かれたドアへと歩いていき、それから『次こそはこんなことはないよ』にするべく

ただそれだけをいき、病室から出て行つた。あとにはウォーロックが纏つていた重い空氣と、荒々しい雰囲気だけが残つた。

5th Violent aura (後書き)

感想待つてます

この頃蒼き流星（前作）のアクセス数を楽しく見ていています。なぜか
とこつとコ一ーク数が30そこらなのにPV数が1200とか凄い
数字をたたき出しているときがあるからです（笑）

蒼き流星を前作から読んでくれているかたもいてとても嬉しいです。
これからも作者は読者のみなさまに満足出来る作品を書く為にがん
ばりていきます

負けるということは、そのものにとつて大きな価値を持つ。ウォーロックはそう考えていた。負けて他人が傷つくのは許されないけどだが、自分達が傷つき、それでいて命がまだ健在であるのならそれもいいとも思っていた。その反省を生かして次に繋げればいいから。

1年前、ムー大陸で敗北を喫してからのスバルたちはメテオGの1件でピンチこそあれ敗北はしなかった。自分達は過去の反省を生かし、大きな壁をぶち破ったのだと。

だが今回の謎の少年、光烈斗の戦いは完膚なきまでに打ちのめされた。どこにも言い訳の材料がないほど、完敗。本気を出されればサテラポリス・WAXAまでも壊滅させたであろう敵に、ウォーロックはどうすればいいか分からなくなっていた。

『…………』

今彼はアマケンの屋上で一人ぼんやりと空を見つめていた。漆黒の夜に光り輝く星の中に彼がやつてきた星があるからなのかもしれない。

『……俺は何をしてきたんだろうな』

彼に似合わないセリフが飛び出す。ここまでウォーロックがへこんでいるのは珍しいかもしない。だが2度と敗北しないと誓った者の敗北は、常人には背負いきれないほどに重い。

敗北したのは1年前の1件だけではない。それまでも何回も敗北をしてきた。しかし今回ばかりは悔しさが心を隅から隅まで支配して心が辛い。彼に涙というものがあるのなら、きっと流している

だろう。

あの銀色の剣士に申し訳が立たないと、心底ウォーロックは思った。あのとき自分達を助けてくれた電波体に謝りたかった。お礼もいえないほどに、まるで風のようになえていった電波体のことを思い出しながら。

「風魔烈風刃！」

ムー大陸でラ・ムーに敗北をしたスバル達はわずかな意識を残しながらもそこで倒れているしかなかつた。あとはただ剣でもバルカンでもレーザーでも、ただ殺されるをの待つだけ。弱りきつた2人に立ち上がるという考えは出来なかつた。そのときに現れたその電波体、周波数もない謎の、どこからやつてきたかも分からぬ電波体。それは万全であつたであらうオリヒメとラ・ムーをいとも簡単に打ち破つた。直接どんな戦いをしていたか見ることは叶わなかつたが、肌に感じられる疾風と、断末魔にも似たオリヒメの悲鳴のおかげでどちらが勝つているかは分かつてしまつた。

だがそこまでだつたら新たな敵が現れたと思つたかもしれない。実はオリヒメにはもう1人の下僕がいて、そいつが謀反を起こしたとも考えられた。あるいはオーパーツを狙つた第三の勢力とも見えたかもしれない。その電波体の声を聞くまでは。

「大丈夫か？」

疲労など感じさせない声、けれどウォーロックが一番気にかかつたのはそのいたわりの言葉だつた。簡素で誰でも吐ける、しかしこの場でそれ以上の言葉があるのだろうか。

「俺は通りすがりの電波人間つつうかなんつうか。この世界を救うためにそこのオリヒメをぶつ倒しに来た。敵じゃないから安心しろ」

『おお、さういふぢやないか』

「……」に来れたのは……あれだ。

るんだよ。その辺はあまり気にするな。説明するだけ面倒臭い

ムー大陸が崩落を始め、ここもすぐに海の藻屑へと成り果てることだろう。

「スバルは寝ちまつて いるのかな？」 声がないところを見ると

「そ、うだ」

「おまえもあんまり無理するな。
それとお疲れ様。ここまでよ

頑張ったよ

そのときウオーロックはここが戦場だということを忘れてしまつた。今この場が崩れて自分達の身が危ないことが頭の中から消し飛んだ。

「だけどまだだ。まだ足りない。おまえ達がこれから立ち向かうもう一つの危機は今回よりも辛い」

『またあるの、か？』

「ある」

未来のことであるはずなのに、超能力でもないかぎりそんなこと分かるはずもないのに、その電波体はきつぱりと言つた。ただの予想とは違い、まるでそれしか道がないという風な口調だ。

「あらかじ、絶対におまえたちはここで立ち止まつねやいけない。

じゃなきゃ俺の助けも無駄だしな」

そこでふとさつきの疑問が蘇る。何故この電波体は自分達を救つたのだと。

『なんで……おれたちを、救つた?』

「……それが俺の役割だから。誰かを救つて、そして……」

だがその続きをウォーロックには聞こえなかつた。電波体が言わなかつたのか、それとも崩落するときの轟音にまぎれたのかは聞きわけがつかない。

「じゃあな、まだ未熟な英雄さん。^{ヒーロー}もう会わないと思つけど、元気でやつていけ」

『ま、待て。せめて、すばる、だけでも』
「ああ、大丈夫大丈夫。おまえたちはなんと生き残る。それは絶対だ。だからそこで寝ていろ」

その言葉を最後に、謎の電波体はどこかへと消えて行つた。ウォーロックの意識はそこで途切れてしまつが、彼らの人生はまだまだ続いていった。それはソロという一人によつて救われたのだと知ることは、意識を取り戻してから数日後ではあるが。

『……それなのに、俺達は………』

あのとき救つてもらつた命、それをシルバー・ウインドのようを使いたいとスバルとウォーロックは決めた。これからどんな災難が地球に降りかかるとも絶対に打ち破るんだと。そして1人でも多

くの人が救われるようになると。

『俺は、どうすればいいんだよ……教えてくれよっ！』

1人の獣の、叫び声が夜空へと轟いた。

「えっ、ウォーロックくんが消えた？」

「うん……もう3日も帰つてこないんだ」

WAXAの病室にはミソラがスバルの見舞いに来ていた。彼女も烈斗に傷を負わされて入院していたのだが、今日ようやく退院することが出来たのだ。

同じ日にスバルは入院して、予定としては今日退院できるはずだったのだがあまりの傷の深さに特効薬を用いても快復までは見込めなかつた。

黄璃病院の特効薬は、車に轢かれ重傷を負つた少年を一週間で感知させるほどなのだ。副作用に腹痛が起ることだけが問題だと思われていたが、どうやら違つたようだ。一般人向けに開発された物である為に仕方ないかも知れない。

「……僕が烈斗に負けても、落ち込んでなかつたからだと思つ」

あのときのウォーロックの表情を思い出す。あれは本氣で悔しがつていた。怒つてさえいたと思う。それなのにスバルが何とも思つていないとこを見れば、キレるのも無理ない。

『ポロロン、ウォーロックなんか気にしたつてしまふがいいわ。どうせふらつと戻つてくるわよ』

「そうだよ。ウォーロック君がスバル君から離れるわけないじゃん」

そう励ます2人だが、スバルにはどうしてもウォーロックが帰つてくるとは思えなかつた。ウォーロックが、自分を見捨てるのではないか。そんな恐怖に駆られてしまう。

もちろんそういうではないと思う自分もいた。スバルとウォーロックは1年を共にし、キズナを深めた。それは他のオペレーターとワイザードとは比べ物にならないくらいに。それが、簡単に切れてしまうとは思いたくも無い。

「……どうしているんだろう?」

窓から外を見る。今はもう夕方だ。オレンジ色に染まつた太陽が今まさに沈もうとしている。空にはもつ月や星たちが煌いており、夜の訪れを知らせている。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。スバル君は心配しそぎよ」「でも3日も戻つてこなかつたのは今までないんだ。それに、今回ばかりは本当に落ち込んでいると思うし」

『負けたことがただ悔しかつただけでしょ? あいつなら明日にでもあかねさんの『飯田荘』に帰つてきやうよ』

それはあるかも、ヒミツラとハープは笑う。たしかにありそなシチュエーションはある。けれど、けれど

「そんなに心配なら私達が探してこようか?」

さつきから浮かない顔をしているスバルが本気で心配になり、まだ病み上がりの状態でそう訊いた。だがその提案をスバルは首を振つて遠慮する。

「これは僕達の問題だから。僕がなんとかするよ」

しかしこのままではスバルの精神がもたないのではないか。そんな不安がミソラの頭を過ぎてしまう。

「そりやたしかに僕も辛いぞ」

そんなミソラの心を察したのか、スバルもやや苦笑いしながら話す。

「でも、僕が悪いんだから。僕が決着をつけるよ。……今は体を休めて、体が治つたら探してみるよ」

「……だけど」

「『めんね、こんなこと聞いちゃって。僕が悪かった』

その自分を責めて自ら傷つこうとする表情を見て、ミソラはもう一度何かをいいかけた。否定してあげたかった、君は何も悪くないと。自分一人だけで背負う必要は無いんだと。だが

『ミソラ、スバル君も疲れているから今日はもう帰りましょう？あなただって退院したばかりなんだから』

相棒からの言葉が遮った。

『さつきも言つたとおり、ウォーロックはゞうせすべすべに戻つてくるわ。気にすることはない』

「うん、そうだね。僕もこんなことなれていないうからせつときは動搖しちゃつてたよ」

ハープの提案にスバルが後押しをする。まるで、すぐミソラを帰したいかのよう。

ハープがそんなことをしたいとはミソラも思っていない。スバルを1人にさせたほうが今はいいと考えているのだろう。逆を言えばミソラには何も出来ないということを知っている。

スバルはハープの提案を僥倖と思い今すぐ一人になりたいと思つてゐる。1人で気持ちを整理したいのだ。」
結局、ミソラは誰にも必要とされていなかつた。

「…………分かつた。体に氣をつけてねスバルくん」

それだけをいふと、ミソラはすぐに部屋から飛び出してしまつた。スバルがそれに對し「うん」というのも聞かず。血のウイザードもその場に残して。

自分が必要とされないと認識してしまつたときほど、哀しこときはない。

『…………ミソラを泣かせちゃつたわね』

「『めん、ハープ。…………ミソラちゃんに酷いこと言つたりやつて』

『それについては本当に殴つてやりたいわ』

ハープは邪惡そうに笑みを浮かべ、その手で拳を作り始めた。けれどそれをスバルに向けたりはしない。

『…………私が探してくるわ。あの馬鹿、どこにいるか分からぬいけど「無理しなくともいいんだよ? ハープも結構怪我を負つたんだし』
よう?』

『あら、ウイザードはすぐに傷を治せるわよ。気にしなくていいわ』

それに対しスバルは微笑むことだけが精一杯だつた。どう会話を繋げたらいいかも思いつかないし、はたしてここで会話をする意味があるのかも分からなくなつてきた。ただその場を曖昧にするくらいが彼には出来なかつた。

『安心しなさい。あいつは私が見つけてくるから。少し時間はかかる

つてもね』

「……ごめんね」

『あいつがいなきやスバル君が悲しむ。スバル君が悲しめばミソラが悲しむんだもの。仕方ないわ。オックスも誘つてみるつもりだけど……』

「時間が空いたらでいいからね？」

『当たり前よつ。ミソラもあんな状態だし、一日中つてわけにはいかないんだから』

それにライブとかも今月はあるし、私がついてないと仕事が回らないのよ、と付け足すハープ。

「今日はありがとう。大分楽になつたよ」

『じゃあ、今度お見舞いに来るときはもっと楽になつていて。ミソラが悲しまないくらいに』

「うん、分かった。がんばつてみる……」

その、微妙に翳つたスバルの顔を横目で見ながら、ハープも病室を去つた。これから向かうのはどこにいるかもしれない、ウォーロックの場所だ。

（全く、本当にどこに行つたんだか……。でも、動けるのは我だけだし、オックスも誘つて何とか探してみますか）

もちろんハープにはウォーロックがどこにいるのか検討もついていない。まさかFM星に帰つているとは考えにくいし、地球、さらには二ホンにいるのは確実だ。

電波体である彼女なら、見つけられないことは無い。暇なときこそ少しだけ探せば、いつか見つかるはずだ。どうせ、キズナが無ければ生きていくくなつてしまつたのだから。

(……やつ者えれば私達は弱くなつたものよね)

F M星にいるじゅのはキズナなんてものが希薄であった。逆にいえばキズナがなくても生きていけた。そんなものがなくとも自分の為に戦えだし、それで何かが不足しているとも思わなかつた。だがもう今は違つてしまつ。キズナがなければハープは何か足りない、寂しいと感じてしまつだらう。この地球という星に、「適応」してしまつた。

(間違いだとは思つてないけど、なんか変な感じがするわね……
…)

キズナが大切だと思つてゐる自分を否定するつもつは無い。それでいいと思う。

(キズナを大切に思つなら、それに見合つたことはしなきゃいけないんだよね……)

今はその隣に誰もいない、孤独なワイザードに向かつて思つ。

(だからさ、やつわと戻つてきなれこよ)

感想待つてます！

感想が迷惑だということは無いので、書い少しだも思つてくださいませひ書いてください。別に一言感想でも結構です！

では、次話からも頑張つてこきます！

それと、希望への架け橋で今さつき感想受付が「ユーザー」からと
いうことになつていまつたが、「制限しない」つまりユーザーでな
い方でも書き込めるようになりました！

本当なら最初からそつするつもりだったのですが、申し訳ない・・・

「……それで、ぶつとばしてきちゃったの？」

少女は夜に浮かぶまん丸とした満月など気にせず、苛立たしげな声を上げた。彼女にとつて快晴の空に浮かぶ星々など、どうでもいいようだ。

「君は前からやってしまったとは思っていたけどや、やらない約束だつたでしょ？」

その問いに、問われた少年は苦い表情をした。

「別に、何か悪いのかよ」

よつやく絞り出した声は、酷く弱々しく聞こえた。彼といつ人間を知つていれば、きっとおかしいと思うことだらう。普段の彼はいつも力強く、どんな人だらうと寄せ付けないオーラがあった。なのに、何故か今の少年には無い。

「悪いに決まっているでしょ？」

そんな少年に対し、少女はいつも通りの調子で問い合わせる。

「WAXA襲撃って、テレビで大々的に報道されているんだからね？　あなた今犯罪者なんだからね？」

そういう詰められている少年　光烈斗は口もつながらも反論した。その顔には動搖の色が見て取れる。

「た、たかが襲撃だろ？ 死人だつていないし、怪我人だつて電波人間だ。そんなに重傷にはならないだろ？」

しかし少女 水城明菜は呆れて溜め息をついてしまった。まるで駄目な弟を見ているような視線に、烈斗の顔が赤くなる。どうやらそんな屈辱的な視線に耐えられないようだ。

「……そういう問題じゃないでしょ？ 堂々とテレビに映るなつてこと」

「え、映つてなんかいないぜ？ 僕はちゃんとカメラを避けたんだ。全てな」

そんな烈斗の弁明を無視して水城はハンターを操作、それから添付ファイルと一緒に烈斗へとメールを送る。

まさか、と思いながら新着メールを開けてみる。急いで添付ファイルを開くと、それはテレビニュースであつた。画面に映つているのは破壊されたRWタワーだけ。

だが映像はそこで終わらない。どこか屋内のカメラ映像に切り替わつたのか、無機質な天井と通路が見える。そこに何かの影が通りかかった。あまりの早さに何が通り過ぎたかが分からぬ。

しかしそこは今の技術で巻戻し、ストップくらいはお手の物だ。すぐに巻戻しが行われて通り過ぎた正体を凝視させられる。

ぱっちりと、光烈斗の姿が映し出されていた。それも今の技術でブレなし、このまま指名手配として出されても問題ないだろう。

「……やつちまつた」

思わず天を仰いでしまつ烈斗。これで最悪の犯罪者としてすぐにでも写真が出回り、外に出るのは難しくなるだろつ。

「あなたどんな目的で攻撃したのかは、わからなくもない。そこについては私も何も追求しようとは思わないわ。でもね、足だけは引つ張らないで」

やう強く念を押す水城は、本気でこれからのこと擔心配しているようだ。つまらないことで失敗したくない、そんな思いがひしひしと伝わ

つてくる。

「……分かつてているよ」

「分かつていいからこんなことになつてているんでしょ」

「……分かつてるつていつてるだろ……」

思わず声を張り上げてしまう。もし彼の近くに机などのものがあればきっとその力で殴り壊していたかもしれない。だが生憎ここは何も無い。窓があるくらいだ。もともと水城が借りている一室なためにこいつなことになつてている。

「…………たしかに言い過ぎたわね」

叫んだせいで息が荒い烈斗に向かって、水城は少々酔の悪さついで謝った。さすがに年下相手に言い過ぎたと思つたらしく。

「…………」

元々自分が悪いのだと、今度は烈斗が謝つた。彼がしぐじらなければこんなことにはならなかつた。もつと言えば、彼が無駄に襲撃をしなければしぐじることもなかつた。

「…………」

嫌な沈黙が簡素な部屋を支配する。外から入つてくる微風が2人の頬を撫でるが、別段気持ちいとは双方感じなかつた。

「…………それで」

嫌な沈黙を無理矢理破つたのは水城のほうだつた。

「何かつかめたことは?」

まさか収穫なしとは、水城は考へていなかつた。襲撃したのならそれなりの成果を挙げてくるのが烈斗だと、彼女は信じていた。

「ああ、掴めたことはいくつかあつた」

それに対し烈斗もさつきの沈黙がなんでもなかつたかのように接する。

「まず1つ目は、星河スバルの実力だな。……あれは酷い、ラ・ムーに負けたのは納得できる」

「そんなに弱かつたの?」

「俺が手を抜いて圧勝」

答えに思わず水城は顔を引き攣らせる。しかしそれすらも気にしないで烈斗は続ける。

「2つ目は、あいつらはシルバー・ウインド キリュウについて

何も知らなかつたみたいだな。名前聞いてもぴんとこないよつだつたし

「…………じゃあ手がかりは？」

「なし」

どうやらそれが一番彼女には堪えたよつで、その場にへたり込んでしまつ。どうやらスバルに落胆してしまつてゐるよつだつた。

「それじゃあ、何の為にここまで頑張つてきたか分からぬじやん……」

あまりにショックが大きかつたのか、「ちょっと外で風に浴びてくる」といつて部屋から出て行つてしまつた。それを烈斗は一瞬追いかけようとしたが、すぐにそれをやめる。彼女が求めているのは、自分ではないことを知つてゐるから。

『……止めないのか？』

そんな彼の心中を知つていながら、質問してくる電波体がいた。見れば部屋の入り口にそれは立つていた。

水色がベースの服に藍色の防具、さらに背中にあるのは二メートルもありそうな、うねつた剣。さらにそこから発せられる周波数がその電波体を異常だと周囲に知らしめていた。

「フランベルジェか。何なんかよつ？」

質問に対し、烈斗は質問で返した。余程答えたくない様だ。

『特に用事は無い。我が主君が、いきなり出て行つてしまつたのだからな』

「こつものじとじょ?」

『だがあまえと2人だけで話す機会はこつものじとじょ?』

何か話すことでもあつたか? と思考を巡らすが烈斗には思いつくことは無かつた。

『ロックマンはどひだつた?』

その問いに思わず烈斗は嘆息しそひ。このウイヤーディスプレイはアーケードの『ロックマン』だ。強そうな奴を見つけると途端に戦おうとする。それが我の本懐だ、といつてゐるのだから手に負えない。

「弱かつたよ。防御力は障子並み」

『ほひ、おまえが戦つて圧勝か。我ならば瞬殺かな?』

「……なんなら今俺と戦つてみる?」

その一言で烈斗の体が『変化』した。それは目に見えない変化だが、電波体であるフランベルジHには分かる。烈斗が『電波化』したのだ。

『今こじで戦つてみるがいい。この部屋はどひする? 我が主が泣くぞ』

『キリコウとの想い出の場所だらひ? 俺がなくなつても悲しまないよ』

『主が泣くことに対して、おまえは悲しむだらひ』

『……だから何? おまえのその口を黙らすことが出来るならぶつ壊しても攻撃するよ』

烈斗がすつと腰を落とし拳を構える。ここからフランベルジHまで5歩の距離、それくらいの距離なら烈斗は1歩で詰められれる。

そう、このままフランベルジェが何もしなければ。

ふつと、風が揺らいだかと思った。それは外から入つてくる微風の物だと、烈斗は信じて疑わなかつた。だから何故自分の首もとにフランベルジェの愛剣 その使用者の名前を冠する剣がぴたりと添えられているのか分からなかつた。

『一つ忠告しておひ』

朗々とフランベルジェは語り出す。

『おまえ風情の、たかが人間を少しだけ超越したような輩が、我輩に勝とうなどと思つな』

その眼光がきらりと光つたかと思うと、次の瞬間には烈斗の首もとが浅く斬られていた。電波体の為に血は出ないが、それでも痛覚はある。思わず首を抑えつづくまつてしまつ。

『所詮はその程度の実力しかないのだ。いきがるな、若造が。我は200年も前から存在してるので? それをどうにかしようとするのがおこがましい』

「がつ、あつ、……でもあのシルバー・ウインドには負けたんだろ?」

最大の挑発のつもりだった。これでフランベルジェを怒らすことが出来れば勝ちだと、そんな浅はかな考えを持っていた。だが、現実はそうはならなかつた。

『そうだな』

あつさりとフランベルジェは肯定した。

『そのとおりだ。我はあいつに負けた。完膚なきまでに』

しかし、と彼は続ける。

『だからこそ我は強くあらうとする。誰よりも、奢ることなく上に上り詰めようとする。決して歩みはとめられない。断じて』

剣を背中の鞘に戻しながら

『おまえとは違うのだよ。分かつたら自分を見直せ』

彼は主の下へと戻つていった。その背中はただ強くあらうとしただけの、誰よりも奮闘し敗北した者の、物だった。

「……あつくしよう」

フランベルジュの背中を見送りながら烈斗は毒づく。ここまで無様な敗北をしたのはひさしひりであつたために、ショックが大きかつた。

「くせつたれ……」

そういわざにはいられないくらいに、彼もまた落ち込んでいた。ハンターの中でリカバリーツールを用ひながらも、彼はゆっくりとカーボンでは治せない心の傷を治そうとする。

「お、ビューフィーのフラン

相棒の名前を略したニッケルネームで呼ぶ水城は、ハンターの中に
入つていった存在へと声をかける。

『別に、何もなかつた』

「嘘だ、烈斗と何か喋つてたでしょ」

『つまらない世間話だ』

やう嘘をつくフランベルジエを横目で見ながら、水城は月光に照
らされる眼下の街を見下ろした。

「これだけの数の人間が生きていると思つと、何だか感動しちやう
よね」

誰に向けたわけでもない言葉、だからフランベルジエも特に何か
言おうとはしなかった。

「これだけの人間を救おうとする人間って、やつぱり凄いと思つよ
ね」

思いを馳せるのは銀色の戦士、今はこの世界にいないであろう存
在。いつかあって、面と向かつてもう一度喋りたい。それだけを思
いながら、彼女はどことも知れずにそのマンションから出て行つた。

8th boy and girl is talking. (後書き)

新キャラ・フランベルジH登場とこいつでした。

え、新キャラじゃない？ HAHHA - そう思つ方もいるかもし
れません。ただここでは新キャラと扱わせてもらいます。

では、感想待つてます

ギャリック砲！

「…………ふう」

ヨイリーは研究室で1人ため息をついていた。一向に烈斗の尻尾がつかめないものもあるが、ウォーロックの足取りが完全に分からなくなつたほうが大きい。

もちろんヨイリーとてウォーロックが戻つてこないとは思つてない。ただもう一週間にもなる。いい加減戻つてこないと、スバルの精神的にもきついものがあるだろ。

時間が空いているときにハープや、復帰したゴンタとオックスなどを搜索をしている。それでも見つからない。

ここまで来るとヨイリーは1つの説が浮かび上がつていた。そう誰かによつてテリートされてしまったのではないかと。

突発的な怒りで出て行つたウォーロックを、誰かが好機とばかりに倒してしまつたのではないか。そうすればいつまで経つても戻つてこないのにも合点がいく。その候補も、最近ここを襲撃してきたのだから。

今の状態である最高戦力であるスバルがいない以上 いても怪しいが 烈斗に対抗するのはほぼ不可能である。出来れば迅速に捕縛して無力化したいところだが、あの逃げ足の速さだ。いくら顔が割れてしまつても見つかりはしないだろ。

この予想は、曉にだけ伝えておいた。すぐにもなんとかする、と言いたそうだつたが、病み上がりの状態で電波変換すれば彼の身体は植物状態になりはてるかもしれない。

そのため、サテラポリスとWAXAでは1つの案が出されていた。それは要約すると、もう1人の電波人間を作り上げること。アッシュ・ヒースと同じように、もういつたいの電波体を造り上げて戦力にしてしまおうといつのだ。

「それで解決するのは何一つないかもしないのに」

これは長官やヨイリー以外の研究者の提案だ。彼らはアシッド・エースが『不良品』であることを知ったやいなや、すぐにもう一つの電波生命体を作り上げようと研究を開始していったらしい。ただ研究の成果が認められることだけを至上の喜びと捉えた彼ら 中には違った考えをしている人間もいる らしい行動だ。その行動は今となつてようやく意味を為そとしているがまた皮肉な話だ。もし、仮にヨイリーがスバルとウォーロックと出会わなければ、そうなつていたかもしれない。あくまで彼女としては地球や人を守るために、新しい電波生命体を作り上げようと奮闘したかもしれない。

だが彼女は知つてしまつた。1人の少年と1体のウェイザードのことを、そしてそのキズナを。だから彼女はそんなことは出来ない。たとえサテラポリスが滅びそうになつても。ウォーロックのことを見捨てるだけは。

「お疲れのようですね、ヨイリー博士」

そういうつて突然研究室に入つてくるのはヨイリーにも見慣れた顔だつた。彼が帰つてくるのを、ずっと待つていたのだから。

「あら、大吾ちゃん。ここに来るのは珍しいわね」

彼とは職場を同じとしているが、大吾と勤務時間内に会つのは極少のことだ。彼とヨイリーでは、研究内容が若干異なることがそれに起因する。

「あんまり考えすぎるのは毒ですよ?」

右手で温かいコーヒーを渡され、軽くお辞儀しながらそれを受ける。だがすぐに口にじょうじょとは思えなかつた。

「分かつてゐるわ。でもね、どうしてもウォーロックちゃんのことを考えると」

「気持ちは分かります。息子の友人がいなくなつては、すぐに見つけ出してやりたい」

「だけども、と彼は付け足す。

「あなたは1人ではないのですから。僕でも探すことは出来ますので」

「……気持ちは嬉しいわ、大吾ちゃん。私もそのことについては結構分かつてゐるつもりです」

自分の身体がオンボロであり、無理しそぎればすぐにでも寿命が縮まることは彼女も理解はしていた。だがどうせもつすぐ消えてしまつ命なら、今すぐ散らせてもいいのではないだろつか。最近彼女はそう思い始めていた。

もちろんそんなことを周りの人間が知れば、すぐにでも引き止めるだろう。それを分かつてているからこうして1人研究所に籠つていたのだ。

「それに、息子があんな悲しそうな顔をしてゐるのに、探せないのは辛いんですよ」

「…………」

その言葉にヨイリーは何もいえなくなつた。穏やかな口調ではあるが、大吾からは息子の為に働きたいという意志が伝わってきていた。

る。

「そうね、たしかにあなたには探させてあげたいわ」「なら

「でもあなたにはどうしてももう一つの仕事を遂行してもらいたいの。どうしてもね」「……光烈斗の謎についてですか？」

あの特殊な電波変換、いや電波化というべきか。あの構造が不可解でヨイリーには仕方が無かつた。なので多くの研究者達には電波化について調べて貰っていた。もちろん、大吾もその一要素である。彼はブラザーバンドを宇宙に広げようとした男である。それは彼の息子によつて成就され、遠く離れたFM星、AM星からは毎日交信がやつてくるほどでもあった。そんな彼に、今AM星との交信を今頻繁に行つてもらつている。

ヨイリーの見解からして、あれは生身の人間をそのまま電波に変えているものだ。だから何のアーマーやバイザーも無い。身体そのものを、ただ電波にしてしまうだけだから。

よつて、AM星人であるウォーロックにその身を電波にしてもらつた大吾にはこの任務を渡したのだ。彼なら何かしらの手がかりを掴めるだろうと思つて。

「ですが、それは他の人間でも出来ます」「

「ええ、それは分かつてゐるわ。でもあなたにはまだ電波化のことについて聞き出して欲しいわけじゃないの」「……何か他にあるんですか？」

「その身体を、元の生身の身体に本当に変えられないかを実験して欲しいから」「……ツ！」

ヨイリーの言いたいことが分かり、大吾は思わず息を呑む。

烈斗が自由に肉体と電波の身体を変えているのは、つまりAM星人と逆のベクトルに働く特殊な能力があるからだとヨイリーは推測しているのだ。それがたしかにあればあの不可解な電波化というのが解けるかもしない。

「ですが、そんなのが本当にあると思つてているのですか？ AM星人だけの能力では！？」

「もちろん、私もあんな年の子がそんなことを出来るとは思つていないわ。もつと別の人間が、それを可能にした……」

だがそんな人間がこの地球にいるのだろうか、大吾は考える。電波変換というのは近年ようやく発見された能力といつても過言ではない。それと類似したものが、ほぼ完成して存在するというのだろうか？

「ギーラという科学者を知つていてる？」

「…………先月アメロッパによつて処刑された？」

ギーラ、ヨイリーが出すのも無理は無い。その名前はたしかにこの二ホンでも有名すぎた。こと電波においては世界の権威といつても過言ではないくらいに。

ただその裏で怪しい噂が立ちすぎた。人体実験、それも孤児などを世界中から集めてモルモットのように実験していると。

それだけならまだ妬みなどが生んだものだと一蹴できる。だがそれ以上に大きな内容がアメロッパから発表された。

ギーラがアメロッパを転覆させようとしていた。

どういう経緯でそれが特定されたかはアメロッパは公表されなかつたが、腐つても最高の科学者を処刑にするくらいではある。アメロッパが公表したことはほぼ間違いないだろう。

科学者が國家転覆を考える時代、と一部では大々的に報道されたものだ。しかし一般人のなかでは、ギーラを知っているものが少ないため、二ホンではあまり報道はされなかつたが。

「あの科学者が集めた孤児の中に、光烈斗がいたら……？」

「……！ それは」

ありえなくも無い話だ。全く正体のつかめない、どこの人間かも分からぬ少年。必然的にそれは孤児か何かだ。

そして、かの悪名高き科学者なら、とんでもな技術すらも開発していたかもしだれない。

しかし大吾の予想を遙かに凌ぐほど、ヨイリーはあり得ない説を言い出した。

「あなたは、FM星人がAM星人を破滅に追い込もうとしたのは覚えていいるわね？」

「……はい。それが何か？」

ケフェウスというFM星人の王が、右腕であるジェミニにたぶらかされて行つてしまつたこと。今ではもう触れてはいけないことという物になつてゐるが、誰も話そとはしないが、過去は変わつていない。

「もし、もしよ。そのときどさくさにまぎれてAM星人を捕縛していたら？」

「……なんで？」

「何でつて、それは決まつてゐるじゃない。人間を電波に変えてしまつためよ」

自分の顔から力が抜けるのを大吾は感じた。突拍子も無い話だと

あっけにとらわれているが、それをおの科學者がやつてしまいそつかもしれないと思つてもいる。

「アンドロメダによつてAM星人はきっと大きな傷を負つていたに違ひない。なら捕まえるのはそう難しくないかもしね」

「ちょ、ちょっと待つてください！ まずなんでAM星人をいきなり捕まえるんですか？ それはおかしい！」

AM星人との存在などここ1年発見されていなかつたものだ。そしてギーラがAM星人の存在を知つていてるわけが無いのだから。

「……あなたは、自分の船員のことを覚えてるわよね？」

「…………もちろん」

嫌な予感がした。ここだから自分と同じように電波にされ、未だ見つかっていない同士のことを出されて、恐ろしい考えがヨイリ一からいわれてしまうのではないかと。

「彼らがもしも、何かの偶然によつてギーラに捕らえられていたら？ 宇宙船で偶然に」

「そんなことがあればすぐに世界中に報道されます！」

電波で出来た人間など世紀の大発見である。それを見つけた科学者が、大々的に世界に報せたいと思わないわけが無い。ギーラという異物は分からぬが。

「……そして捕まえられた彼らは全てを話したのかもしれないわ」

無視して続けられるヨイリーの言葉があまりにも無慈悲に大吾の耳へと入り込んでいく。やめてほしいと懇願しても、最初の用を忘

れてしまつべりーに。

「宇宙には、人間を電波に変えてしまつ生命体がいるつて」

あくまで自分の仲間がどうなつたまでは、推測をいわないのが
優しさか。けれど大吾もそんなことを聞かされたら、考えずに入ら
れなかつた。自分の仲間は、ギーラによつて殺されたのだと。

9th Much anticipation (後書き)

感想待つてます

そういうやツイッターやってます。何か質問あればお願ひします

<http://twitter.com/#!/mationaka/seiye>

現実とはいつも残酷なものだ、と水城明菜は思つ。いつも自分に 対しては酷いを仕打ちをするのではないかと錯覚してしまつくらいに。

「ほら、これがレポート用紙だ」

担任の教師から数十枚にも及ぶ紙束を渡され、思わずげつそりしてしまつ。何故二ホンには学校があり、通わなければいけないのだ。別に法律上通わなくてもいいのだが、それで就職の幅が狭まるためにほぼ強制と言つて過言ではない。本当に残酷だ。

「先生……いくら私がさぼつたからってこれはあきらめないと悪いませんか？」

水城は2日前にあつた数学の授業をさぼつていた。それも無断欠席、当然その罰として何か授業の代わりになるものを科さなければいけないので。だがこれは多すぎる。なんていつたつて問題集から問題を300問選んで解いて丸付けをしようというのだ。

「思わないな」

眼鏡を掛けた堅物そうな教師は水城のいつていることなどものともしなかつた。さすが天下の穿城大学附属高校の教師といったところか、甘さなど微塵も持つていない。

「授業を休んだということは悪だ、水城。どんな理由があつてもそんなことは赦されない」

「別にいいじゃないですか。あまりの熱に連絡する」とも出来なかつたんですから」「熱だらうが休む」ことは変わりない。それで赦されるわけではない

教師はそういうてわたりと職員室から水城を出て行かせようとする。今は昼休みだが教師も暇というわけではない。小テストや次の授業をどうするかなどを考える時間が昼休みというわけでもあるのだ。1人のサボリ魔のせいで邪魔されでは困る。

「いいじゃないですか。3分の1くらい減らしても」「どのくらい授業が進んだか、おまえは知っているのか？教科書で言えば10Pが進んだんだ。すぐに追いつけるとでも思っているのなら、私の授業をなめすぎだ」

「」の高校は1年生のうちに3年分の授業過程を終わらせ、2、3年生は大学の授業に入るのだ。もちろん授業の進みは早く、きっと他の高校生なら1週間で退学届けを出してしまはるかもしれないほどだ。

「このまえのテストは学年1位ですが」

何とか宿題を減らそうと努力する水城は、過去の実績を出して食い下がる。しかしこの教師には通用しない。

「1位だからなんだ？ 次も1位を取れると思つていいのか？」

あくまで過去の栄光だと切り捨てる。「」もでさつぱりと切られてしまい下がりようも無いはずなのが、水城は諦めない。これは世間一般では「諦めの悪い子」と言われる。

「取れます」

断言した。授業を熱（仮病）で休み授業内容がさっぱり分かっていないのにそれでも彼女は学年1位を取れるといったのだ。その自信と無謀さは盛大な拍手と嘲笑で応えなければいけないはずだ。けれど教師はそうしない。

「無理だな」

断言した。この教師もこの教師でただものではない。全開のテスト前の数日間、水城が無断欠席で休んでいたのにも関わらず学年1位を取っていることを知っているのにだ。どうからそんな確信が持てるのか知りたいくらいである。

「おまえには無理だ。取るためににはそのくらいの問題量を解かなければいけない」

「そうしなくとも取れます」

「いや無理だ」

こうした会話が耳に入つてくるのは他の教師にとつては迷惑なのが、苦情は無い。なぜなら他の教師は生徒達に質問攻めにあい優しくレクチャーしているからだ。簡単に言えば水井城が食い下がっている教師が嫌われているだけなのだが。

「努力をしていない人間には無理だ」

「私だつて家で努力しています」

「家で『も』努力しろ。学校でもだ」

もちろん教師とて水城の容量のよさは知っている。彼が担当して

いる生徒の中では恐らく一番だろう。それは認めるが、彼女が努力しないのが教師の立腹の原因だ。彼女は上を田舎そとしない。この学校に入つてその実力をさらに伸ばそうとは考へていないので。

「嫌ですよ。出来ることを何でまたやらなきゃいけないんですか？意味が分かりません」

「それがおまえの成長に繋がるからだ」

「……つていうか、これ次の単元も入つているじゃないですか！授業でやつていないので…」

「予習をしておけどこりこりとだ」

「何ですか！」

「何でもだ」

そんな会話をしていると遂に時間が観念したのか授業五分前の予鈴が「キーンコーンカーンコーン」と学校中に鳴り響く。それを聞いて、しかし水城はまだめげていない。ここまでくると『教師に食い下がつた時間』でギネス記録保持を狙えるかもしねれない。

「わたしは宿題なんてやりたくありません」

「いい加減にしろー」

しかしそろそろ教師がキレて、記録保持をすることは出来なかつた。水城は無理矢理に退室をせられてしまう。

「なんなのよあの先生！」

既にしまつているドアに文句をぶつかける。もちろんドアは何か言つことはしない。ただ自分自身を締めることによって存在意義を成し遂げているのだが、さすがとドアだ。

『少しあは静かにしたからいいだ？ 我が主よ』

水城の大声にさすがに参つたとばかりにハンターからフランベルジェが声を出した。

「だつて、これは酷いよー 何でこんなにも問題解かなきゃいけないのー？」

『サボつたからであります』

「ただけども、あわざるじやん！」

『我には多いのかよく分からないうが』

「とにかく多いのー」

職員室前で叫ぶ女子高生なんて非常識としか考えられないのだが、特にとがめられない。職員室のドアは防音対策がばっちりで教師には聞こえないのだ。

「酷い教師もいたんだ……私はがっかりだよ」

『斬ればいいじゃないか』

恐ろしいことをあまりにも平然と言われて、思わず水城はそのまま会話を続行しようとしてしまつた。だが何かおかしいと気づいた彼女は、恐る恐る下僕フランベルジェへと訊く。

「今なんていつた？」

『斬ればいいじゃないか、と』

「あほか！」

もしフランベルジェが実体化していたなら思いつきり突込みをかましていたところだらう。

「お金が無ければ盗めばいいって思うのと同じよ」

『けれど、それが一番手っ取り早いだろ？』

「そりゃ そりだけど……」

「……」にも常識の無いものがいたようだ。彼の場合は200年間も殺し合いばかりしていたので、そう思つのも無理は無いのかもしない。しかし自分のウイザードがこれではいつか人を殺してしまうのではないかと思に将来に不安を覚えてしまう。

「魔法があればいいのに……」

『そんなものに憧れるのはどうかと思つが？』

「届かないこそ憧れるんだよ」

本氣が冗談が分からぬ。そういう水城。どうやら彼女はさつきの教師との会話で相当疲れているらしかった。だがフランベルジエに「すぐに教室に戻つたらどうだ？」といつも遣いは出来ない。騎士として恐らく失格だ。

「はあ……あの人には届かないのかなあ」

彼女が今思ひ浮かべているのはある少年のことだ。今はもう届かない存在、どこにいるのかも分からぬ。生きているのかさえ確証の持てない、淡い存在。

『私は届くと思つが？』

フランベルジエが思ひ浮かべているのは銀色の剣士の顔だ。届くと思う、というよりは届いてみせるといつもつがつがついているかもしれない。彼ならたしかに不届の鬪志で届くかもしれない。あの最強の剣士へと。

「あなたと私が思っている人は違うでしょ？」

それでも納得のいかない水城に止めを刺すように、授業開始のチャイムが鳴った。その音にぎょっとする水城。どうやらまだ余裕があると思っていたらしい。

「なんで教えてくれなかつたのよ！」

「言ひ分サないゾや ない 」

次は化学よ！？

彼女は数学は出来るが化学が苦手だ。次の授業に出なければテストが危うくなってしまう。

「うわああああ、びうごよひー。」

そういうながら教室に帰還する主人を見て、置いていかれた騎士は大変そうだなどほんやり思つていた。フランベルジエは別に彼女と24時間一緒にいるわけではない。というか学校には来なくてもいいよとも言われている。

何故彼がここに来るのかと問われれば、それは彼自身にも分から
ない。どこに行く予定も無いのだから、ついていつてみるというの
が答えだろうか。

100

そんな彼はある気配を感じていた。どこかに何か異物がいるよう

だ。それはウイルスと呼ばれる、彼に言わせれば雑魚のような存在

『私も暇だから戦わせて貰うか』

もとより戦うことが彼の唯一出来ることだ。暇で暇でしかな
いときに、敵が現れてくれるのはとても嬉しい。どうやら屋上にい
るようだ。それも約10体くらい。

そうと分かれあとは行動あるのみだ。フランベルシユは周波数変換で屋上へと一気に移動する。さつきまでは天井があつたが、今はそれも無く無法地帯に陽光が突き刺さる。

予想通りにウイルスはいた。だがそれは少しひんべるじょと予想が異なる。ウイルスというよりは、ウイザードといったところか。

『グオオオオオオ』

だがその声はもはや人工知能とは思えぬほどにいかれており、野獸を髪髪させる。

これは

フランベルジュは知識が乏しいため分からぬが、このウイザードは俗に言つてノイズドウイザードという存在だ。ウイザードから生まれるノイズでウイザード自身が壊れてしまうと表現すれば分かりやすいか。

しかしフランベルジHにとつてそれはどうでもいいことだ。あくまで敵だと分かればそれでいい。敵がどんな名前をしていようが、彼にとつては一銭の価値も無い。

『ちよつびいい、斬られてもらつか』

背中から一メートル超の大剣を構える。それは波打つ剣、かつて炎の剣とも評されたその名前は「フランベルジエ」。

『少しば楽しませてくれよ?』

そういうと同時にフランベルジエは突っ込む。それに気づいたノイズドウイザードもソードを出し応戦しようとする。春の学校の屋上で、一つのバトルが展開しているとは、まだ誰も知らずにいた。

「…………

スバルはといふと、もう病院は退院していた。その体は完治しており、副作用の腹痛ももつ治まつた。だから彼の顔に宿るのは笑顔か心配してくれたみんなに対する謝意だけのはずだつた。

なのに今の彼には何も宿つていない。あえていうならば虚無。青空を見上げる彼は何の表情を顔に出していなかつた。

授業中、先生に注意されようがただただ空を見ていた。誰かに話しかけられてもその目を空から外すことはなかつた。もしかしたら今は見えない星を見ているのかもしぬなかつたが、周りの人間からしてみればスバルがおかしくなつたとしか言えないだらう。

ルナ達はなんとか話しかけようとしたが、スバルから出る雰囲気に怖気づいて何も出来ずについた。あんなにもスバルが暗い顔をしているのが、恐ろしかつたのだ。

5年生当初はあんな顔をしていなかつた。ただ学校嫌いの少年だと思っていた。学校を嫌がるだけで、あんなにも何も乾いた表情をしていなかつた。それはただ父親がいなくなつたのを、あかねが必死で支えだが故のことだ。

「どうしましょう、委員長……」

異物を見るかのような眼で、キザマロはルナに対して助言をひつた。それは仕方ないのかもしれないが、あまりにも露骨過ぎた。

「……キザマロ」

思わずルナはキザマロに怒鳴りうがとしたが、怖くなるのも分

かつていたために強くはいえなかつた。

「い、いっちょ俺が背中を叩いてやるぜ」

弱弱しく「ンタもそういうが、彼とてそんな勇気は出せないだろう。口だけではなんともいえるが、実際近づいて叩くのは至難の業だ。

クラスメイトの大半がスバルに近づこうとしない。席の近い人間はどうすればいいかと泣き出しそうにもなつていた。それくらいの感情がスバルの中で渦巻いている。

がたりと、音がした。スバルが立ち上がったのだ。全員が全員びくりと体を揺らす。しかしそんなことを気にすることも無くスバルは教室を出ようとする。

「ど、どこに行くのよ！？」

思わずルナが声を掛けた。それは勇気というよりも反射というほうが近いかもしれない。ルナもしまつた、と心の中で思つていたのだ。彼女も最初から声をかけるつもりはなかつた。

その乾いた瞳がルナへと向ぐ。光の無い、闇しか存在しない瞳。それを向けられてルナは思わずたじろいでしまう。

「……屋上」

だがスバルの発したのは一単語だけだつた。すぐに教室を出て屋上へと向かつていつてしまつ。今度こそ誰も止めようとしなかつた。誰も止められるものがいなかつた。人間があんなにも感情を捨てられるのだと、思つてしまつたから。

スバルは屋上で鉄柵にもたりかかりながらさつきまでと同じように空を見つめていた。周りの迷惑になることだけは分かつていたので気を利かせたつもりでいた。自分のせいで周りの人間が困るのだけは我慢できなかつたのだ。

「…………

数ヶ月前、今とは違つた気持ちで同じように空を見つめていたときのことだ。ウォーロックと大吾は流星のように戻つてきた。願つていたから、戻つてきた。キズナのおかげで2人は戻つてくれたのだと、あのときにスバルは本氣で思つていた。

だから今回も、願えばきっと戻つてくれるだろうと。いつも通りの彼の笑顔が見れるだろうと思つていた。ウイルスを倒しに行こうぜとさそつてくれると願つていた。

しかしいくら空を見てもウォーロックは戻つてこない。空に見えるのは青く澄んだ空と、白く柔らかな雲、それと白銀に輝く太陽だけだ。

今オックスやハープ、WAXAなどが探してくれていることはスバルも知つていた。だがそれでも見つからないのは、FM星に帰つてしまつたからではないかと近頃スバルは考えていた。もう自分といられないと思い、故郷へと帰ることは有り得る。

たつた一つの敗北のせいだ。たつた一つの、しかも死人さえ出でない負けのせいだ。しかしそれがウォーロックにとつては重かつたのだろう。負けてはいけないものだつたのだろう。生きていればいい、他人が傷つかなければそれで伊と思つてゐるスバルとは違うのだろう。

敗北が、負けに對してのペナルティ、そのどちらを重く見るかが2人の違ひだつた。似てゐるようで違つ。結局2人は同じ思想の持ち主ではなかつた。そつとは知つてゐたが今まで意識していなかつたのだ。

「……ウォーロック」

空っぽのハンターの重みを感じながら、相棒の名を呼ぶ。返事は無い。装着されたアダプターにはエンブレムもなくなってしまった。ただの空虚なハンター。スバルと同じで、何も無い物体。

「何で出て行つてしまつたんだよ」

そのとき、ようやくスバルの顔に感情といつものが現れた。それは涙だ。一つ流れたかと思うと、三つ四つと数をどんどん増していく。

「何でだよつづく

その程度のキズナだつたのかと。その程度の間柄だつたのかと。問わずにはいられない。確かめずには要られない。今はいな相棒へと。

「戻つてくれなきゃ、寂しいよ」

相棒のいない英雄は、あまりにも弱弱しく、あまりにも脆すぎた。おもちゃを取り上げられてしまつたように、スバルは何をするわけでもなく、呆然と空を見る。空はこんなにも綺麗で、澄んでいるのにも関わらず、少年の心一つ晴らすことは出来ない。

「何があったの？」

そう訊いてきたのが誰なのか、最初は誰か分からなかつたのだ。驚きによつて振り返つてみると、そこには黒髪の、優しげな顔立ち

をした男の子が立っていた。

そういえば、新しいクラスの人だっけ？

今更だがスバルたちは始業式をはじめ、クラス替えをした。スバル達4人組は一緒にルナの仕事がはかどるようにと、のクラスになっていた。またカイという銀髪の少年も一緒にクラスであつたのはスバルも覚えていた。けれど黒髪の少年は思い出せない。そこまで目立つような人間でもなかつた。

「……誰ですか？」

今までほとんど他人を無視してきたスバルが、初めてまともな応対をした。それを見て少しだけ表情を和らげると、黒髪の少年は自己紹介をした。

「宇宙銀河ソラギンガつていうんだ。君のクラスメイト」

「…………何のようですか？」

ここでスバルに声を掛けてくる理由が分からなかつた。彼とはまともに話したこともない。故に心配される道理も無いと思っていた。

「君が、さつきから酷い顔をしているからさ。何かあつたのかと思つて」

「…………君には関係ないでしょ？」

「同じクラスメイトじゃないか。そんなこといわないでよ」

まだ新しくなつて一週間もたつていないので、何を言つているのかとスバルは思つた。普通始業式が始まつてから落ち込んだ人間がいれば、誰も相手をしないのに。それともルナと同じく委員長になりたくて票集めをするつもりだろうか。

「……僕はね、趣味が人助けなんだ」「どこのヒーローだよ」

思わずスバルは嘲笑いそうになってしまった。そんな人間なんて、実在は自分がそうではないか？ スバルの思考がばらばらになってしまいそうになる。

「そうだよね、おかしいよね」

照れて笑う少年は、しかし嘘で言っているようではなかつた。本当に彼の趣味は人助けなのかもしない。

気づけば銀河はスバルの隣へと来ていた。しかしスバルはそれを拒もうとはしなかつた。拒むよりも銀河と話したいと、何故か思つていたのだ。それが何故なのかは分からぬ。

「……僕は他人が悲しんでいる顔を見ていると、辛くなるんだ」「何で？」

「君だつてそうだろ？ 他人が悲しい顔をしていると自分も辛くなる。でもたいていの人はそれから目を反らしてしまうんだ。以前の僕もそうだつた」

「……」

「でも僕は変わつたんだ。ロックマンに出会つて」

その単語を聞いて、思わずスバルは眼を見開いた。ここで自分の話題が出るとは思わなかつたのだ。銀河は自分の正体を知つてゐ！？ 大きすぎる疑問のせいで声が上手く出ない。けれど銀河はそのことについては触れなかつた。

「僕は、メテオGの事件のときに、スピカモールにいたんだ。ほら、一時期ノイズドライザードが各地で大量に暴れたときがあつたじゃ

ん。そのときに僕は両親と出かけていたんだよ

「それはスバルも覚えている。他でもないスバル本人が解決したことなのだ、忘れるわけがない。

「それで、僕達は暴走したウイザードに襲われたんだ。そのときは本当に怖かったんだ。……僕も、両親も死んじやうかと思っていた。でもね、そのときロックマンが助けてくれたんだ。まるで、流星みたいに現れてさ」

「けれどスバルはそこまで詳細には覚えていなかつた。助けた人間1人1人の顔までは覚えていない。あのときは無尽蔵に現れるウイザードを倒すのに必死だつたのだ。

「そのとき僕は嬉しかつたんだよ。彼に命を助けられて。また生きられるんだつて思えて」

「…………

「だから、僕はそのときからロックマンみたいに誰かを助けられるなら助けようつて思い始めたんだ。彼みたいに力は強くないけど、弱虫だけど」

自分の手によつて救われて、自分のようにならうとする。それはとても嬉しくて、けれど残念だつた。自分が、残念で仕方なかつた。こんな人もいてくれるのに、自分は今泣くことしか出来ないのだと。

「だからさ、何かあつたら僕に相談してよ。出来る限り力になるからさ」

こんなにも優しい人間に憧れているのに、今の自分は嘆くことしか出来ないのだと。

「 僕は」

気づけばスバルは口を動かしていた。

「僕は、大切な友達と喧嘩しちゃったんだ」

銀河に何かを求めていたのかもしれない。救いが、それとも慰めか。心の救済か。

「友達は、もつずつと帰つてこないんだ」

「……それは、君のウイザード?」

「ぐりとスバルは頷いた。銀河はその話を聞いてゆっくりと頭の中で整理する。

「 いつか帰つてくるよ

帰つてきたのは、誰もが言える言葉だった。

「いつか、ひょっこりと帰つて来るよ」

その答えに、思わずスバルは激怒しそうになる。責任を持つてそんなことを言つてくれ。軽々しくそんなことを言わないでくれ。次々に言葉が生まれ、それを一気に言おつかと思い口を開けて

「だつて、きつとキズナが深いから」

「あつ……えつ……?」

「君は、大喧嘩をしたことがないのか。だから分からぬのかもしれないけど、そんなものだよ。友達との喧嘩なんて。僕だつて3ヶ

月間絶交していたことあるし」

朗らかに笑う彼の眼は、やはり嘘を言つて居るよつには見えなかつた。

「だからさ、君はその友達が帰つてこれるよつに状況を整えるべきだよ。それが今君に出来る」と

「…………」

「喧嘩したからつて、すぐに仲直りしようとするのはこことじやない。むしろ、これからを生きるならやつての時期も大切だよ。これからも、一緒に生きていくんだからさ」

「僕は、君なら出来ると思つよ。スバル君」

11th He want to be a HERO · (後書き)

感想待つてます。

屋上から去つていったスバルから遅れ数分、ギンガも自らの教室へと向かつていた。困つていた人を助ける、そんな馬鹿げたことを罵られることを、彼は自分が出来る範囲でいつも行つていた。

「何やつていたんだ？ おまえが屋上に行くなんてどんな風の吹き回しだよ」

教室に入るやいなや、最後列に座つている少年がギンガに話しかける。あまりにも遠慮ないその口調に内心苦笑しながら、ギンガはその少年を見る。

小学生にしてはやや高い身長と白雪を思わせる銀髪、それでいて周りの人間を威圧する瞳。それがギンガの友人であるカイという少年の容貌だ。

「なんで屋上にいつているつて分かつたんだい？ まさか隠れて僕を尾行していたの？」

「いやさ、俺のウィザードがいつも通りに風を浴びに行つたら、おまえを見かけたらしつて。何でも女みたいな男を慰めていたから、ホモなんじやないかつていつてたぞ？」

カイは意地悪く笑みを浮かべる。だがギンガはその程度では怒つたりはしない。カイとは長い付き合いだ。こんなことで喧嘩していたりしていたら毎日喧嘩だらう。

「女の子みたいな顔してたつてのは本当だけど…… 気をつけなよ？」

「ここ本人がいるんだからさ」

「大丈夫、面と向かつては言わないさ」

ひらひらと手を振る彼の顔はいつもこんな感じだ。その性格からカイの他人からの評価は一分される、「嫌い」か「近づきたくない」かだ。

友人としてどうにかその性格を矯正してあげたいとは常々考えているのだが、どうやってもカイは直らない。地獄に落ちてもこの人を馬鹿にしたような友人は性格を曲げたりはしないのだろうと、ギンガはそう諦めている。

「んで、どうだった？ 星河スバルは」

本題だとばかりにカイはさらに笑みを深くした。結局カイが話しかけてきたのはその話題のためだけだ。いつもならカイはギンガがどこ行こうが何もいわない。カイとギンガが喋るときはそう多くない。カイが本当に興味のある話題が存在するときだけ、会話する。いささか変わった友人関係だ。

「あれはロックマンなのか？」

「…………別に僕はロックマンか調べるために話したわけではないからね」

話題が話題なだけに2人とも声が小さくなる。噂だけにとどまっているそれを、そう他人に聞かれることはあまり好ましくなかつた。それが真実であればおおっぴらに喋る氣でいる人間は、ギンガの目の前にいるが。

「僕にはそう見えなかつたな。なんだか、普通に悩みがある少年つて感じ」
「それでも何かなかつたのか？ そういうのすぐ気づくだろ、おまえ」

「あのね、人を警察官か何かと勘違いしていない？」

「ちにしる分からないよ。僕からしてみれば、ね」

「俺からしてみても分からなかりおまえに訊いているんだろうが」

「残念だ、とカイは大げさに溜め息をついた。だつたら自分でなんとかしてこい、とギンガは言いたかったが、カイが自分の性格からしてそんなことは無理だろうと分かつてていたので言わなかつた。

「まあそうだよな。そんな簡単に分かるわけないよなー」

「でも逆になんでスバル君にそんな噂が流れているんだろう。僕はそれが気になるよ」

「去年のうつの卒業生にいたんだつてよ、この学校でロックマンを見た奴が。科学部の部長じやなかつたつけ？」

「ああ、なんか口ケツトが暴れたときにつ？」

「そこまで詳しくは知らないけど、とにかく数ヶ月前だよ、そんな噂が流れたのは」

数ヶ月前のコダマ小学校はそれはそれは大荒れだつた。科学部が総力を挙げて作った口ケツトは暴れるわ、生徒会選挙で電波体が暴れるわ、その裏で職員室の上に位置する教室には大穴が空いていたりと、もはや失笑レベルの惨状だつた。

「…………じゃあ別にこここの生徒つてわけでもないんじゃないの？」

「なんでだ？ 普通こここの生徒だつて思うだろうが。それに知つているだろ？ おまえだつてレゾンに入力したはずだ。スバルって名前を」

「そうだね。でも僕はそつは思えないんだ。だつて

僕を救つてくれたロックマンは、あんな脆く儻げな顔をする
ような人ではなかつたから。

「…………ふうん。そりやまた適当な理由で」

「どこかしらカイは不満気だ。スバルがロックマンではないということだが、それほど残念がる理由をギンガは知らない。

何故そこまでロックマンにこだわるのかを何度も訊こうとした。カイはあまり他人に興味を示さない。おそらく星河スバルに噂さえ流れていれば話しかけようともしなかつただろう。なのに噂があつただけでこれだ。

しかしギンガは訊かなかつた。訊いた所でカイがはぐらかすことは予測がつき、さらに彼自身そんなことに深く興味が無かつた。

この2人はただ、話し相手がいればいい奴らだ。それが誰だらうとかまわない。ブラザーとさえいえない2人。だから彼らはブラザーバンドを結んでいない。結ぶほど強固なキズナなど、彼らには最初から皆無だつた。

「ま、分かつたこともあるし今回はこれでいいや」

そこでカイはギンガから視線をはずした。これでカイとの会話は終わりといつ合図だ。いささか味気ない終わりかたがカイとギンガの会話だ。

授業開始5分前の予鈴が鳴つた。それを聞いてギンガも自分の席に座りうつとする。

「…………や」

振り向けば会話を終えたはずのカイがギンガへと視線を向けている。

「なんであいつは悩んでたんだ？」

「………… ウィザードがいなくなつたんだつて

少々驚きながらもギンガは答える。

「それ、本当か？」

カイはその答えを本氣で疑つてゐるのか、声がすごんでいる。

「俺、あいつのウィザードを見たことがあるぞっ。」

放課後、ギンガが行動しようと思つたのは单なる正義感だった。誰かに救つてもらつたのだから、自分も誰かを救いたいという欲求があつた。

もとより彼は普通の人間だ。ロックマンと違つて何の力も無い。ただの小学生でしかない。彼のウィザードも、平均的な力しか持ち合わせていなかつた。

「つていつてもねえ……」

救いたいのだから仕方ない。憧れてしまつたのだから諦めるしかなかつた。無論彼は自分の命を最優先にしている。命が危なくなりそうなことはしないつもりだし、近年崩壊寸前といわれる廃墟にも入ろうとは思わない。

そう、そこに目当てのものがありそれでも、躊躇するくらいの人間らしさを持つてゐる。

眼前の朽ち果てた建物はからは人間の住んでいる気配はない。今

すぐに倒壊してしまい、ただの平地になってしまった。そつた予感もある。

「「」の町の外れのほうに飛んでいったのを見たぜ」

カイのその一言でギンガはここまで来てしまっていた。彼は特に習い事をしているわけでもないため、別にここに来ることは難しくも無かった。親には寂れた廃墟に行くとは言わず、友達と遊んでくるとだけ伝えておいた。

「「」に本当にいるのかな」

隠れるにはたしかにうつてつけの場所はある。人が住めるような場所ではないが、電波体が住む分にはなんの不便も無いだろ。たしかにここにいる可能性はある。

けれど家出したウイザードだ。何日もここに住んでいるだろうか？ 放浪するならともかく、わかる。遠くに行きたい、その心は理解できる。だがこんな中途半端な場所に住む必要があるのでだろうか？

「それともスバルくんに探し当ててもらえるまで待っているのかな？」

しかしこんな寂れたところを探すならもとと他の場所を探すだろう。カイのように目撃証言があればいいが、それでも多くの人間が見たというわけではなかった。実際カイの帰り道を通る人に訊いて見たが、見た人は一人もいなかった。

「ああ、でも」

スバルのウイザードがいつ家出したのかを聞いていなかった。家

出する前にカイが見ていたとするならば、ijiではなくその先の公園にでも向かつていてる途中かもしれない。

「……結局分からぬじやないか

入ろうかどうかさつきから迷つてているのだが、いまだにその決心がつかない。入ろうとする勇気が彼にはまだ足りなかつた。だからこゝそこつは言つたのかもしれない。

『入つてきなよ』

その廃墟の中から、声が響いてくる。

『別に怖がる』とはなこた。死ぬわけじやない』

声から相手がどんな表情をしているのかは読み取ることが出来ない。ただ冷淡に誘つだけ。

「…………」

相手が誰なのかは分からない。けれどこれがどれほど異常な事態なのかは分かつてゐる。

従つ必要など無い。言つとおりにすればどうなるかなんて、ギンガ自身予想がついていた。

けれど 彼は歩いてしまつた。

ただの正義感で。バカみたいな恩返しといつ気持ちで。その身がどうなるのかも知らずに、ギンガは歩いてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067v/>

蒼き流星 大地の恵み

2011年11月23日13時47分発行